

宮城県仙台市

（文化財調査報告書）

— 平成14年度発掘調査概報 —



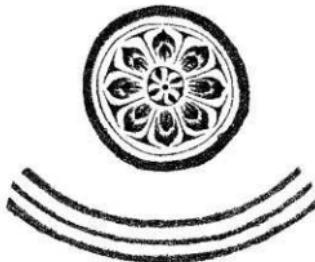
2003. 3

仙台市教育委員会

宮城県仙台市

郡山遺跡 23

— 平成14年度発掘調査概報 —



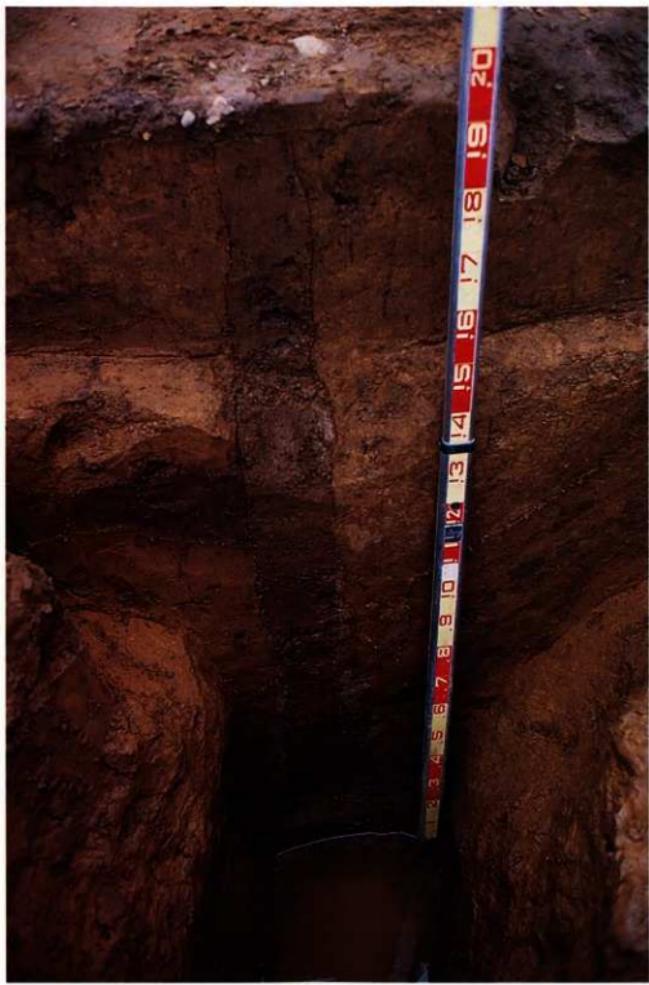
2003. 3

仙台市教育委員会



148次 SII2048出土遺物

C—917・C—918
C—927・C—920・C—921・C—933
C—924・C—922・C—925・C—923
(C—917 壺・C—918 壺・C—933 壺
C—920～925、927 壺)



148次 方四町Ⅱ期官衙北辺材木列（SA616）断面

序 文

郡山遺跡の本年度の発掘調査事業は第5次5ヵ年計画の3年次にあたり、主に郡山廃寺南部を対象に調査を実施しました。その結果、寺院に関わる建物跡と南辺の堀跡（材木列）を発見することができましたが、まだ寺院の中核伽藍を区画する廊庭や築地を発見するには至っておりません。また「仙台平野の遺跡群」で実施した個人住宅の建築に対応した調査においては、想定された方四町Ⅱ期官衙の北辺の他にⅠ期官衙の堀跡（材木列）やそれ以前に遡る竪穴住居跡が発見され、竪穴住居跡からは関東地方の人々との関わりを想起させるような貴重な土器類が出土しました。個人住宅地の小規模な調査においても予想を超える重要な成果をあげることができました。国庫補助事業による継続的な発掘調査を開始してから23年が経過しておりますが、その間大地に埋もれていた謎の歴史が次々と明らかにされてきました。

本書は平成14年度の発掘調査成果の概要をまとめたものです。国や教育委員会及び全国の研究機関などにおける飛鳥時代から奈良時代にかけての歴史の解明に資したいと思います。本書の記載は、調査報告の性格上専門用語を使用せざるを得ないことから、今後は、市民の皆様にもわかりやすい周知方法を検討したいと思っております。

今後、郡山遺跡の発掘調査が進み、調査結果の広報などを通して全国的な評価がさらに高まり、仙台市及び郡山地区のまちづくりに大きく貢献できるよう努めてまいりたいと思います。

平成15年3月

仙台市教育委員会

教育長 阿部芳吉

例 言

1. 本文書は郡山遺跡の平成14年度範囲確認調査の概報である。

2. 本調査は国庫補助事業である。

3. 本概報は調査の速報を目的とし、作成にあたり次のとおり分担した。

本文執筆 長島榮・Ⅲ、Ⅳ、Ⅵ、Ⅷ、図

松本知彦 I、Ⅱ、Ⅴ、Ⅶ、図

遺構トレース 菅井百合子、岡まり子、石垣美佐江、大友浩美、小村由紀子

遺物実測 伊勢多賀子、大友広美、黒田照子、小林広和

遺物トレース 菅井、岡、大友(浩)、小村田、石垣

遺構写真撮影 長島、松本

遺物写真撮影 長島

遺物補修復元 赤井沢千代子、三浦千賀子

図版作成 長島、松本、菅井、吉田りつ子、岡

写真図版作成 長島、松本

編集は長島がこれにあたった。

4. 遺構図の平面位置図は相対座標で、座標原点は任意に設置したNo1原点 ($X = 0$ 、 $Y = 0$) とし、高さは標高値で記した。

5. 文中に記した方位角は真北線を基準としている。

6. 遺構略号は次のとおりで、全遺構に通し番号を付した。

S A 柱列などの場跡 S E 井戸跡 S X その他の遺構

S B 建物跡 S I 竪穴住居跡・堅穴造構 P ピット・小柱穴

S D 溝跡 S K 土坑

7. 遺物略号は次のとおりで、各々種別毎に番号を付した。

A 繩文土器 F 丸瓦・軒丸瓦 K 石製品

B 弥生土器 G 平瓦・軒平瓦 L 木製品

C 土師器(ロクロ不使用) H 尾尾

D 土師器(ロクロ使用) I 陶器

E 須恵器 J 磁器

8. 建物跡模式図中の記号は以下の基準により図示した。

●=柱痕跡の検出されたもの

○=掘り方のみ検出されたもの

△=他遺構との重複により検出されないもの

9. 遺物実測図の網スクリントーン張り込みは黒色処理を示している。

10. 本概報の土色については「新版標準土色帳」(占山・佐藤:1970)を使用した。

11. 本概報中の掘立柱建物跡の記載の中で「柱痕跡は21cmの円形で…」とあるものは、柱痕跡の直径が21cmの意である。

目 次

序 文

例 言

I	はじめに	1
II	調査計画と実績	2
III	第145次発掘調査	4
1.	調査経過	4
2.	発見遺構・出土遺物	4
3.	まとめ	4
IV	第146次発掘調査	6
1.	調査経過	6
2.	発見遺構・出土遺物	6
3.	まとめ	27
V	第147次発掘調査	29
1.	調査経過	29
2.	発見遺構・出土遺物	29
3.	まとめ	30
VI	第148次発掘調査	32
1.	調査経過	32
2.	発見遺構・出土遺物	32
3.	まとめ	40
VII	第150次・第151次発掘調査	46
1.	調査経過と発見遺構・出土遺物	46
VIII	総括	49
	調査成果の普及と関連活動	55

I はじめに

平成14年度は郡山遺跡範囲確認調査第5次5カ年の3年次にあたり、下記の体制で臨んだ。

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育委員会生涯学習部文化財課

文化財課 課長 青柳良文

管理係 係長 高橋 泰

主事 藤井明美

整備活用係 係長 田中則和

主査 木村浩二

主任 長島榮一

主事 長谷川隆二

文化財教諭 松本知彦

調査係 係長 鍋原信彦

主査 渡部弘美

主任 渡部 紀

主事 工藤信一郎

文化財教諭 宮内 周

発掘調査、整理を適正に実施するため調査指導委員会を設置し、委員を委嘱した。

委員長 工藤雅樹（福島大学行政社会学部教授 考古学）

副委員長 今泉降雄（東北大学文学部教授 古代史）

岡田茂弘（東北歴史博物館館長 考古学）

進藤秋輝（東北歴史博物館副館長 考古学）

桑原滋郎（前宮城県考古学会会長 考古学）

須藤 隆（東北大学文学部教授 考古学）

宮本長二郎（東北芸術工科大学芸術学部教授 建築学）

発掘調査および遺物整理にあたり、次の方々から御教示をいただいた。

地権者 星市男、庄子たか子、大友はる、矢口正史

調査参加者 赤井沢千代子、石垣美佐江、伊勢多賀子、伊藤貞子、大友広美、大友浩美、岡まり子、尾形陽子、日下啓子、黒田照子、小池房子、小林広和、小村田紀子、佐藤よし子、庄子範男、菅井百合子、鈴木由美、高橋ヨシ子、牧かね子、三浦市子、三浦千賀子、宮嶋都、鎌水芳子、依田光子、吉田りつ子、渡辺貞子

さらに下記の諸機関の方々から適切な御教示をいただいた。

国立歴史民俗博物館教授 阿部義平、奈良文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部 安田龍太郎、松村忠司、西口壽生、東北学院大学教授 佐川正敏、東北芸術工科大学助教授 北野博司、講師 村木志伸、蔥島文理大学教授 石野博信、岡山理科大学教授 亀田修一、横浜歴史博物館 平野卓治、栃木県足利市教育委員会 木村友則、埼玉県鶴山町教育委員会 渡辺一、広島県府中市教育委員会 土井基司、道田賢志、宮城県教育庁文化財保護課 村田晃一、多賀城跡調査研究所 佐藤則之、仙台市博物館 佐藤洋

II 調査計画と実績

平成14年度の発掘調査は、郡山遺跡発掘調査の第5次5カ年計画における第3年次目にあたる。第5次5カ年計画では、以下5項目の達成を目標にしている。

- (1) II期官衙中枢部の構造の解明
- (2) 郡山廃寺の内部構造の解明
- (3) I期官衙の構造と変遷の解明
- (4) 南方官衙の範囲と性格の解明
- (5) 郡山遺跡調査成果概要書の作成 などである。

これらは平成11年度郡山遺跡調査指導委員会で審議し、了承されたものである。詳細は「仙台市文化財調査報告書第250集郡山遺跡21」I-2を参照していただきたい。これにより今年度は「(2)郡山廃寺の内部構造の解明」を主目的として、これまでと同様に国庫補助事業である「市内遺跡発掘調査」で発掘調査を実施することにした。発掘調査は、昨年度より仙台城跡の主要遺構の遺存状況を把握するための発掘調査も含め、総経費3800万円、国庫補助金額1900万円の予算で計画した。またこれまで個人住宅などの小規模開発に伴う発掘調査は「仙台平野の遺跡群」として実施してきたが、今年度も該当する発掘調査が必要になったときには同様に対応することとした。したがって総経費3800万円を郡山遺跡発掘調査に2000万円、仙台城跡に1300万円、仙台平野の遺跡群として500万円という配分にした。これにより郡山遺跡発掘調査については、以下のような実施計画を立案した。

表1 発掘調査計画表

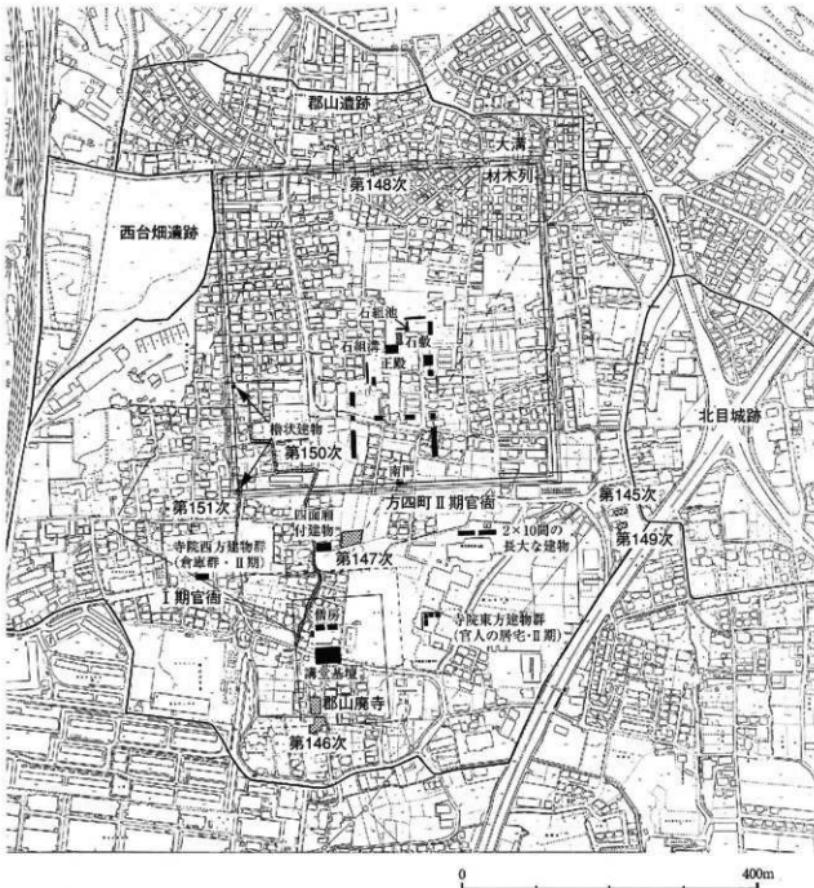
調査次数	調査地区	調査予定期間	調査原因
第146次	郡山廃寺南部	1,000m ²	5月~11月 範囲確認調査

4月以降、共同住宅建築や水道管理設工事ならびに個人住宅の建築等で、5箇所の調査が必要となった。よって年度当初から予定されていた第146次調査、共同住宅建築に伴う事前調査として第149次調査、個人住宅の建築に伴い調査の必要となった第145次、第148次、水道管理設工事に伴う立会い調査として第150次調査の6箇所を以下のとおりに実施した。

表2 発掘調査実績表

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間	調査原因	対応
第145次	遺跡内東部	50m ²	4月17日~4月19日	個人住宅建築	仙台平野の遺跡群
第146次	郡山廃寺南部	450m ²	5月14日~12月6日	範囲確認調査	郡山遺跡発掘調査
第147次	南方官衙西地区	470m ²	9月24日~12月13日	範囲確認調査	郡山遺跡発掘調査
第148次	方四町Ⅱ期官衙北辺	72m ²	10月3日~10月31日	個人住宅建築	仙台平野の遺跡群
第149次	遺跡内東部	57m ²	9月9日	共同住宅建築	開発に伴う事前調査
第150次	遺跡内南部	20m ²	9月10日~11月13日	水道管理設工事	※
第151次	方四町Ⅱ期官衙南西コーナー	20m ²	3月3日~3月5日	用水路改修工事	※

これらの調査のうち第146次調査は1,000m²の調査面積を予定していたが、地権者の土地利用の実情を考慮し調査範囲を縮小して実施した。また、仙台城跡本丸大広間跡付近の発掘調査について、その位置を確定するために当初予定した調査区を拡張することとなったこと、またIII石器発掘調査問題に關連し、後期及び中期III石器を確認する



第1図 郡山遺跡全体図

ために山田上ノ台遺跡の発掘調査が必要となつたため、それに伴い予算計画も年度途中で一部変更した。仙台城跡の発掘調査に3,005,660円、山田上ノ台遺跡の発掘調査に900万円の予算の増額ならびに配分をした。したがつて総経費50,005,660円となっている。なお今回「仙台平野の遺跡群」として調査した第145次、第149次調査は郡山遺跡内の調査であるため、報告は本書に含め報告することにし、「仙台平野の遺跡群」としての報告は単独で刊行はしないことにした。よって本事業の報告は「仙台市文化財調査報告書第263集郡山遺跡23－平成14年度発掘調査概報－」、「仙台文化財調査報告書第264集仙台城跡II」「仙台文化財調査報告書第265集山田上ノ台遺跡」の3書がある。

III 第145次発掘調査

1. 調査経過

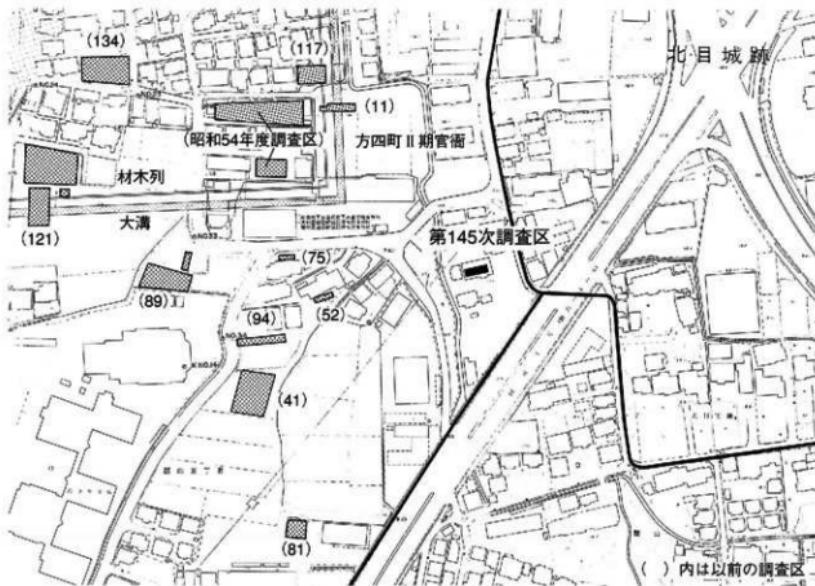
第145次調査は、仙台市太白区郡山4丁目14-13星市男氏より、同地内の郡山4丁目206-2において住宅新築に伴う発掘届が、平成14年4月1日付けで提出されたことにより実施した。住宅の基礎が遺構の検出面より深く、遺構を損なうため発掘調査を実施した。調査は住宅の建つ部分を対象に東西14m、南北3.5mの調査区を設定し、平成14年4月17日に表土排除を実施した。現況より深さ0.6m程の第Ⅲ層上面で遺構を検出した。発見された遺構数が極めて少なかったため、調査は平成14年4月19日に終了した。

2. 発見遺構・出土遺物

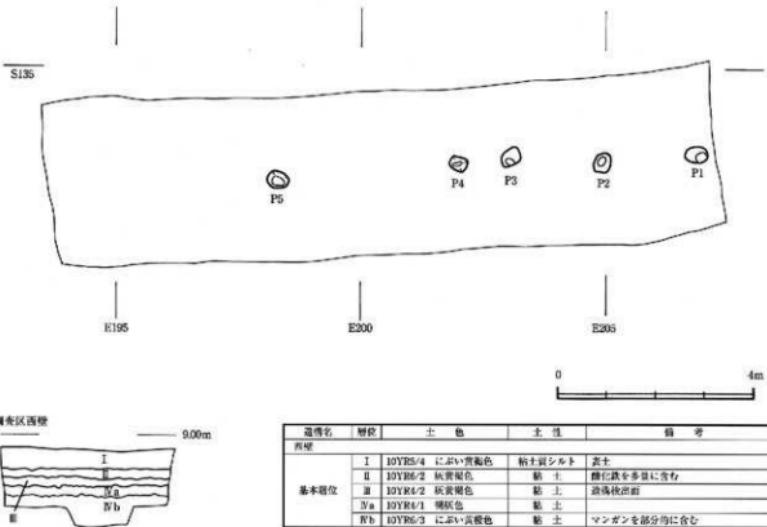
今回の調査で発見された遺構は、ピットが5である。これらのうちP2、P3は直径10~20cm程の柱痕跡が確認された。またP1についてもその可能性がある。P4の底面からは扁平な河原石が1点出土した。これらの遺構は基本層位第Ⅲ層上面で検出されているが、第Ⅲ層中からも少量の須恵器片が出土していることから官衙の置かれた古代の遺構ではないと見られる。下層の第Ⅳ層上面でも遺構の検出作業を行なったが遺構は検出されなかった。

3. まとめ

調査を実施した地点は、方四町Ⅱ期官衙の南東隅から120m程離れた地点である。西側の水田面との比高差が0.8m程あり、土地利用の形態も違っている。東には中近世にかけての平城である北目城跡もあることから、これまでの調査による基本層位や遺構の検出状況が異なっているのである。官衙の時期の遺構は発見されなかった。



第2図 第145次調査区位置図



第3図 第145次調査区 平・断面図



1 第145次調査区 西壁断面



2 第145次調査区全景—第III層上面—(西より)

IV 第146次発掘調査

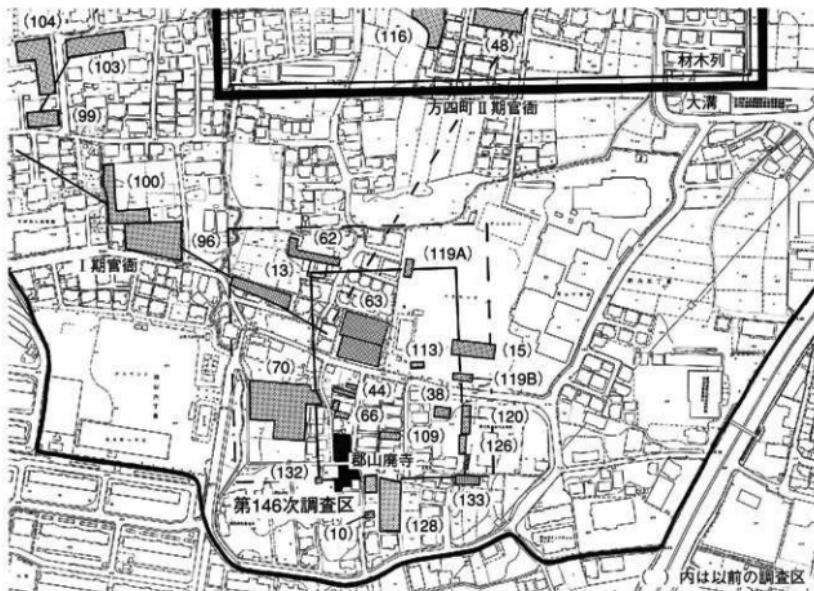
1. 調査経過

第146次調査区は郡山廃寺南部に位置する。この地点は昭和56年度の第12次調査で発見した講堂基壇と平成11年度の第128次調査で発見した南門跡との間にあたる。ここは多賀城廃寺や大宰府の付属寺院である觀世音寺の遺構配置を見ると、廻廊や築地などで金堂や塔を囲む寺院内でも最も重要な地区の南端が含まれると考えられる。郡山廃寺でも同様な遺構配置が存在すると推定され、住宅地での制約の多い調査ではあるが、郡山廃寺の構造解明のためにこの地点で第146次調査を実施することにした。調査区は北からA・B・C・D区として現在の土地利用の形態に合わせて設定した。そのうちB区は昭和56年度に寺院南辺の確認を目的として調査した第10次調査区（Aトレント）と重複している。この第10次調査ではA・Bトレントを設定し、のちに寺院南辺となるSA1850材木列の南北を発掘調査し遺構の発見に至らなかった。また今回の調査ではD区とC区のベルト状に残した表土直下からSA1850材木列が発見されたため、調査中に撤去し、D・C区は一連のトレント形態をなしている。

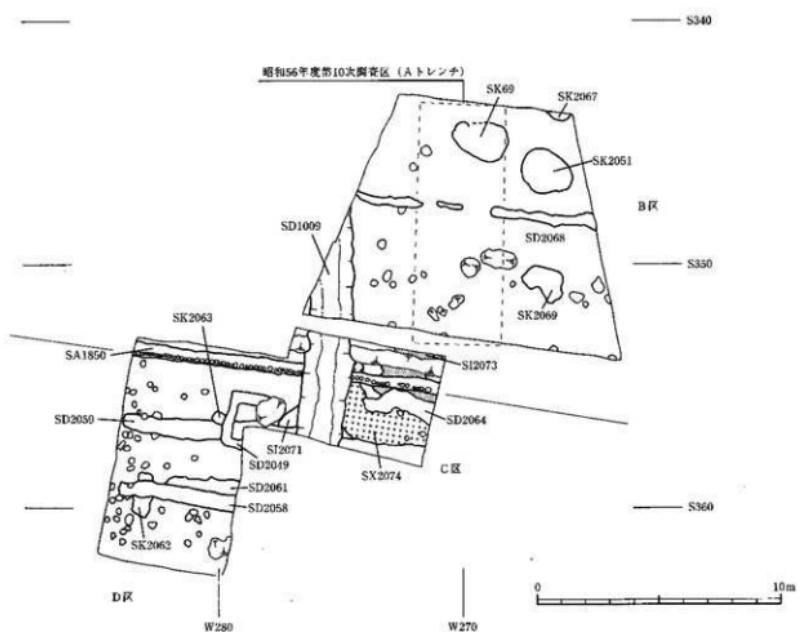
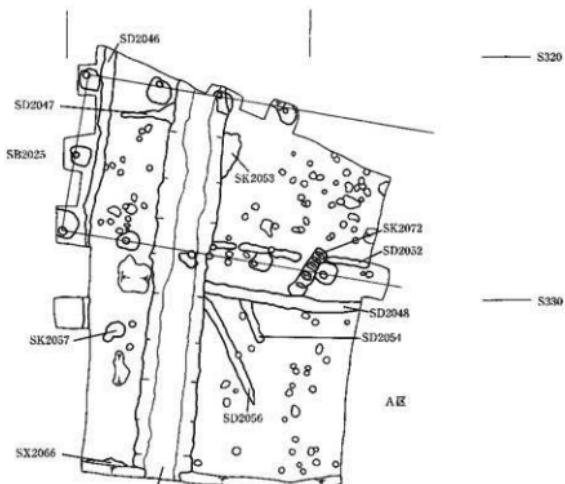
調査は5月当初から準備に入り、平成14年5月16日から表土排除を開始した。A区の寺院中板を区画する遺構が存在することが想定された位置からは柱穴が列をなして発見されたが、精査の結果建物跡となった。C・D区からは第128次調査で発見したSA1850材木列の西への延長部を発見した。平成14年11月11日まで発掘調査を行い、整地作業を含め終了したのは12月6日である。

2. 発見遺構・出土遺物

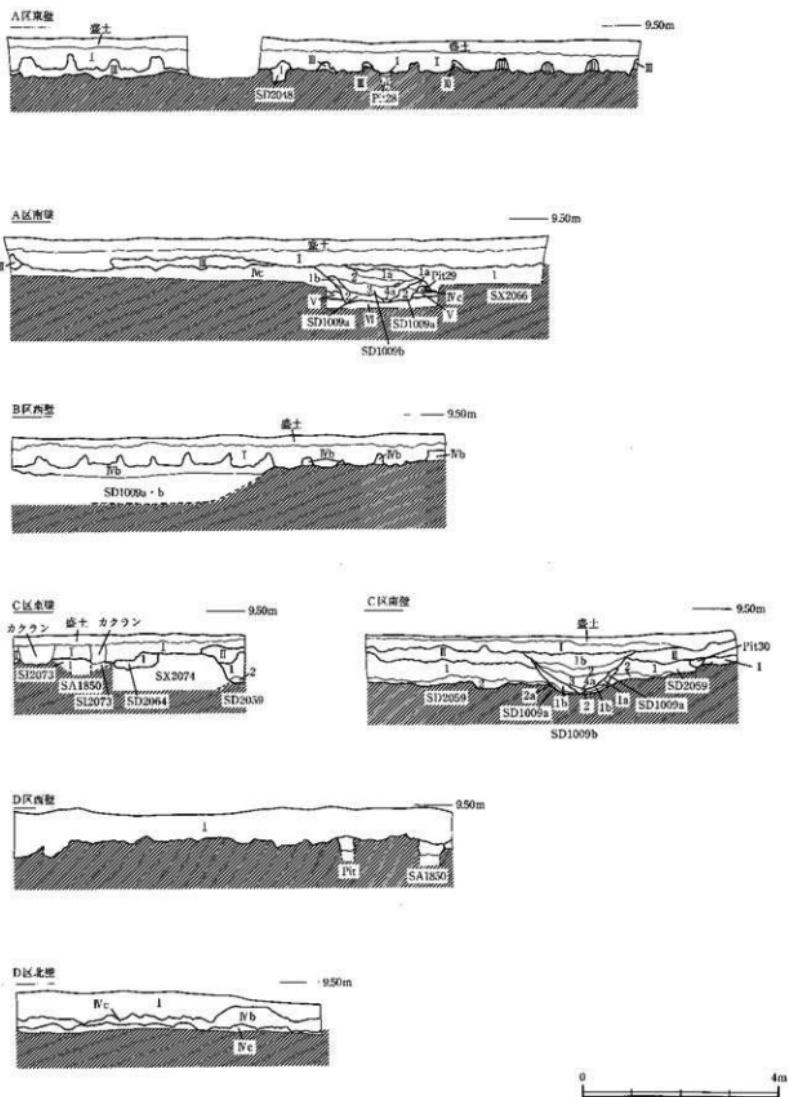
今回の調査で発見された遺構は、掘立柱建物跡1棟、材木列1列、溝跡13条、竪穴住居跡2軒、土坑9基、性格



第4図 第146次調査区位置図



第5図 第146次調査区構造配置図 (1/200)



第6図 第146次調査区断面図 (1/100)

第146次調査表

地盤名	折合	土色	土性	備考	
基本部位	I a	10YR5/2 黄褐色	シルト	透水性上	
	I b	10YR5/3 緑褐色	シルト	透水性中	
	II	10YR2/1 黄色	シルト	透水性上	
	III a	10YR2/2 黒褐色	シルト	褐色シルトを含む	
	III b	10YR3/3 褐褐色	シルト	黒褐色シルトを含む	
	IV a	10YR3/4 暗褐色	シルト	黒褐色上を含む	
	IV b	10YR4/6 紅褐色	シルト	赤褐色とを含む (D14出現)	
	IV c	10YR4/6 褐色	砂質シルト	砂質が多い	
	IV d	10YR6/8 明黄褐色	粘土		
	V	10YR5/3 にふく黄褐色	粘土	石器出土 (A1) (有)	
VI	10YR5/3 にふく黃褐色	砂質粘土	砂質が強い		
A区 溝					
SD1009b	1	10YR4/3 暗褐色	シルト	全体に小プロックで火成岩を含む	
Pt28	1	10YR2/3 細粒化	シルト	褐色上を含む	
A・C区 屋根					
SD1009a	I a	10YR4/1 黄褐色	シルト	褐色沙土をブロックで含む	
	I b	10YR2/1 黄褐色	シルト	褐色沙土をブロックで含む	
	2a	10YR4/1 黄褐色	粘土	褐色とモザイクとなり、既次の堆積が認められる	
	2b	10YR5/3 にふく黄褐色	粘土		
	2c	10YR4/5 にふく黄褐色	粘土		
	I a	10YR4/6 褐色	砂質シルト	高褐色土をブロックで含む	
	I b	10YR4/2 灰黃褐色	砂質シルト	高褐色土をブロックで含む	
	Z	10YR4/2 灰黃褐色	シルト		
	3a	10YR4/1 黄褐色	粘土		
	3c	10YR3/1 黒褐色	砂質粘土	風化層	
SD1009b	10YR7/6 明黄褐色	粘土	底部に礫化鉄が夾在		
	4b	10YR4/1 黄褐色	粘土	全体に鐵化鉄を含み、底部には白色粘土を含む。川面露出土 (C14)	
	SX2065	1	10YR2/2 黄褐色	シルト	
	Pt29	1	10YR3/2 黄褐色	砂質シルト	川面土を含む
	C区 壁面				
S12673	1	10YR3/3 黄褐色	粘土質シルト	砂質土	
SA1530	1	10YR3/3 黑褐色	粘土質シルト	白色粘土を小ブロックで含む	
1	10YR2/2 黑褐色	粘土質シルト	黑色粘土を小ブロックで含む		
SD1009b	2	10YR6/6 明黄褐色	粘土	高褐色粘土を含む	
SD2064	1	10YR3/2 黄褐色	砂質シルト	高褐色土をブロックで含む	
1	10YR4/3 黄褐色	粘土質シルト			
SX2074	2	10YR4/4 黄色	シルト	高褐色土を含む	
3	10YR2/3 黑褐色	粘土質シルト	白色粘土を細かく含む		
C区 壁面					
Pt30	1	10YR3/2 黑褐色	粘土	褐色土、黒褐色土を小ブロックで含む	
D区 溝					
SA1860	1	10YR3/3 黄褐色	粘土質シルト	白色粘土を小ブロックで含む	

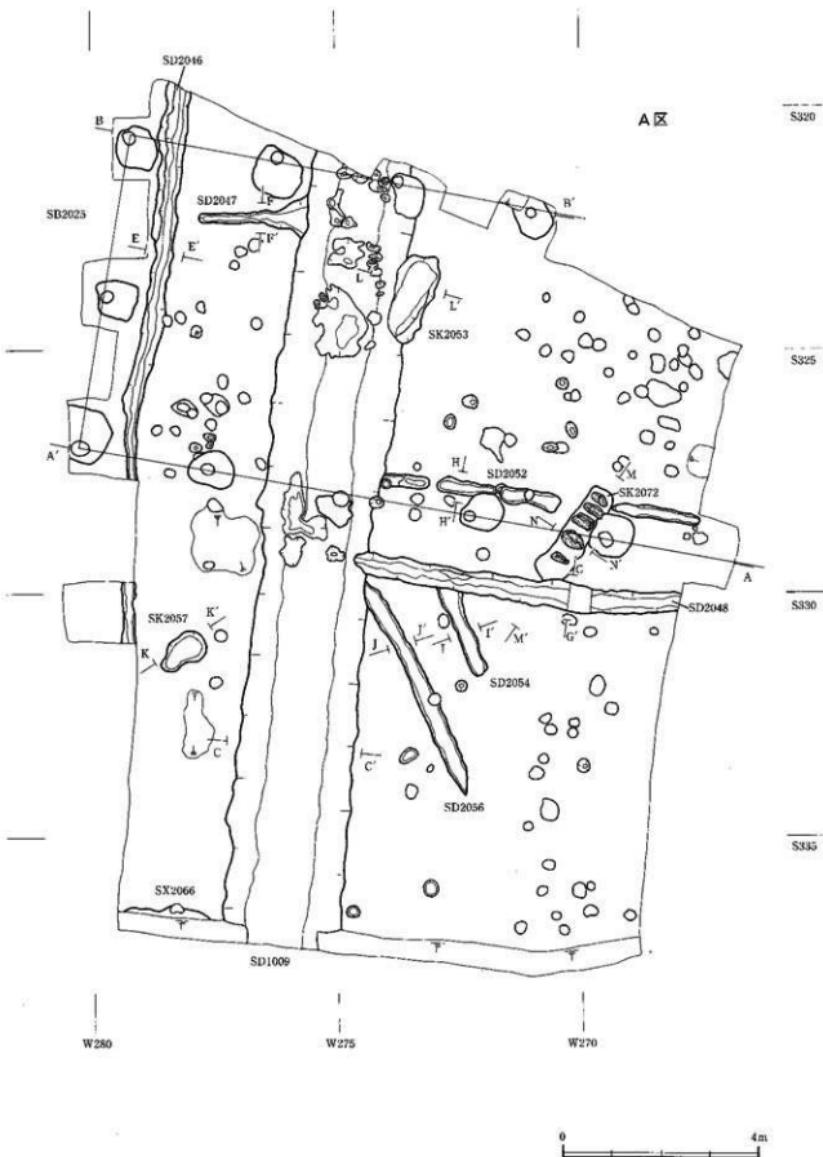
不明遺構 2基、ピットなどである。これらの遺構は基本層位第IV層上面で検出されているが、調査区の壁断面における検討の結果、SD1009a・b溝跡のみは第III層上面より掘り込まれた遺構であることを確認した。

SB2025掘立柱建物跡 桁行2間(総長6.5m、柱間寸法320~330cm)、桁行5間以上(総長10.8m以上、柱間寸法250~280cm)の東西棟の掘立柱建物跡である。方向は南桁行でE-3°-Sである。柱穴は一辺70~110cm程の隅丸方形で、柱痕跡は20~30cmの円形または楕円形である。柱穴には抜き取り穴が認められず、柱痕跡中に炭化物・焼土が含まれていることから建物が焼失したものと考えられる。

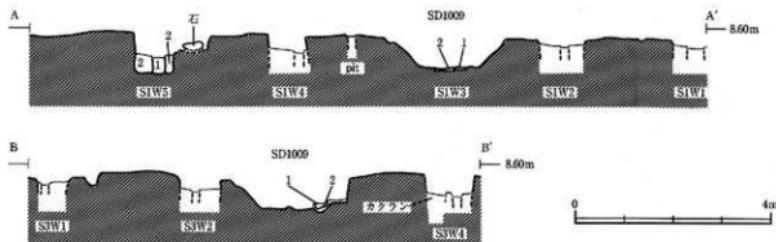
遺物は掘り方中ではS1W4から凸面に縄叩きのち擦り消し、凹面には縄叩きで複数の痕跡のある平瓦G-116(第14図14)が、土師器の小片とともに出土している。また同様にS1W5、S2W1、S3W2、S3W4よりは瓦の小片が出土している。S1W3、S2W1を除き各柱穴掘り方よりは土師器の小片が少量出土している。柱痕跡ではS3W2の最上層よりロクロ使用の土師器で回転糸切り無調整の底部片が出土し、S3W1からもロクロ使用の土師器小片が、S1W5からは瓦の小片が出土している。またS1W2、S1W3、S3W4の柱痕跡からも土師器の小片が少量出土している。

SD2052溝跡、SK2072-1坑、SX2074を切り、SD1009溝跡に切られている。

SD1009a・b溝跡 調査区を南北に縱断する溝跡である。北に隣接する昭和61年度の第66次調査で検出したSD1009溝跡の南への延長部分と考えられる。上幅200~250cm、底面幅35~65cm、深さ70~80cm、断面形は逆台形の溝跡で、底面はおおむね平坦である。方向はA区付近の北部ではN-0°-Eであるが、B区付近の調査区南部



第7図 第146次調査A区平面図 (1/100)



測定名	層位	土色	土性	備考
SW3	柱状記 1	10YR2/3 暗褐色	砂質粘土	
	10YR2/2 にじい黄褐色	粘土		
削り方	2	10YR2/2 黒褐色	粘土	混合層
	10YR4/4 暗色	砂質粘土		
SW3	柱状記 1	10YR5/2 灰黃褐色	粘土	砂、黒褐色粘土を含む、2層より砂が多い
	2	10YR6/2 灰黃褐色	粘土	砂、黒褐色粘土を含む
SW3	柱状記 1	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	白色土、鉄化物を含む
	10YR7/3 にじい黄褐色	粘土		
削り方	2	10YR4/4 暗色	砂	後挖削り方盤土、柱状跡の下は砂質が強く粘土がさわめて少ない

第8図 SB2025南桁行断面図 (1/100)



3 SB2025建物跡（西より）



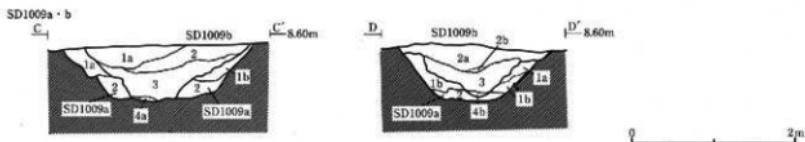
4 北桁行柱穴（西より）



5 南桁行柱穴（西より）

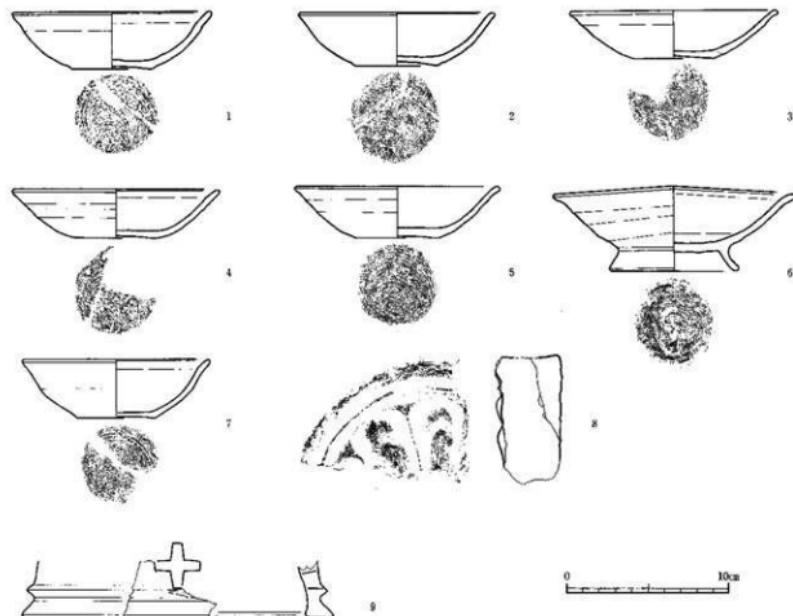
ではN-5°-Wとなりやや蛇行気味となる。検出総長は約35mである。堆積土の観察から2時期（a→b）あると考えられる。

遺物はSD1009a溝跡の第1層からは小型の赤焼き土器D-83坏（第10図4）の他に、土師器、須恵器、赤焼き土器、瓦の小片、陶器丸皿片が、第2層からも赤焼き土器、瓦片などが出土している。SD1009b溝跡からも第1層から小型の赤焼き土器D-84、87坏（第10図1、2）の他に土師器、赤焼き土器、瓦片、陶器I-54塊または鉢の小片、第2層からは土師器高坏、須恵器壺片やそれらの小片、瓦片、陶器I-53香炉、I-57大鉢、I-55皿、I-56塊などが出土している（註1）。第3層からは小型の赤焼き土器D-86坏（第10図5）、D-91高台付坏（第10図6）、第4層からは十字型の邊かしのあるE-476円面鏡（第10図9）が、底面から赤焼き土器D-89坏（第10図7）が出土している。その他SD1009b溝跡の上層からはやや扁平な赤焼き土器D-90坏（第10図3）、これまでで都



遺構名	層位	土色	土性	備考
SD1009a	1a	10YR4/1 褐灰色	シルト	褐色砂を小ブロックで含む
	1b	10Y20/1 黒褐色	シルト	褐色砂を小ブロックで含む
SD1009b	2	10Y4/1 褐灰色	粘土	褐色砂との互層となり、軟泥の堆積が認められる
	1a	10YR4/6 黄色	砂質シルト	黒褐色土をグロッケで含む
	2a	10YR4/2 底質褐色	シルト	
	2b	10Y25/4 濃い黄褐色	粘土質シルト	
	3	10Y4/1 褐灰色	粘土	
SD1009c	4a	10Y27/6 明るい黄褐色	粘土	底面に鐵化鉄が発達
	4b	10Y4/1 褐灰色	粘土	鐵化鉄を全層に含み、表面には白色鉄土を含む

第9図 SD1009溝跡断面図 (1/60)



問題番号	登録番号	種別	器形	出土地点	底径(cm)	外観測定	内面観察	備考	写真図版
1	D-84	赤焼土器	环	SD1009a	1	口径12.5 底径3.5 高さ5	二縁部～全体ロクロナギ、底面円軸み切り	ロクロナギ	33
2	D-87	赤焼土器	环	SD1009b	1	口径12.2 底径3.2 高さ5.2	二縁部～全体ロクロナギ、底面円軸み切り	ロクロナギ	35
3	D-90	赤焼土器	环	SD1009c	1	口径12.8 底径3.0 高さ4.9	二縁部～全体ロクロナギ、底面円軸み切り	ロクロナギ	37
4	D-83	赤焼土器	环	SD1009d	1	口径6.4 底径3 高さ5	二縁部～全体ロクロナギ、底面円軸み切り	ロクロナギ	32
5	D-86	赤焼土器	环	SD1009e	3a	口径12.6 底径3.15 高さ5	二縁部～全体ロクロナギ、底面圓軸み切り	ロクロナギ	34
6	D-91	赤焼土器	高台付环	SD1009f	1	口径12.5 底径4.8 高さ8	口縁部～全体ロクロナギ、脚付ナギ 底面圓軸み切り、一部カヌ	ロクロナギ	36
7	D-89	赤焼土器	环	SD1009g	底面	口径11.6 底径3.6 高さ4.8	二縁部～全体ロクロナギ、底面圓軸み切り	ロクロナギ	36
8	F-96	瓦	瓦束瓦	SD1009h	4	底面高3.5 底径(19.4)		半分通有文	44
9	K-4761	円筒瓦	SD1009i						39

第10図 SD1009遺構出土遺物

山庵寺から出土している単孔蓮華文軒丸瓦と同様な文様であるF-96軒丸瓦片（第10図8）やN-114、115鉄滓（写真40、41）などが出土している。

SA1850材本列、SB2025掘立柱建物跡、SD2047・2048・2056・2059溝跡、SI2071聚穴住居跡、SK2053土坑、SX2074性格不明造構を切り、SX2066性格不明造構に切られている。

SD2046溝跡 上幅20~55cm、底面幅10~20cm程、深さ20cm程で、断面形はおおむね逆台形の溝跡であるが北部では西壁中に段を持つ。壁は傾斜をもって直線的に立ち上がり、底面は平坦である。方向は北部ではN-0°~E（真北方向）であるが、南部ではやや屈曲気味となる。検出した全長は11.5mである。堆積土は2層である。

遺物は第1層より頭部が「く」の字状の須恵器窓口縁部片、瓦片、第2層より平瓦片が10点出土している。

SD2047溝跡 上幅20~90cm程、底面幅10~55cm程、深さ3~10cm程で、断面形は逆台形の溝跡である。壁は傾斜をもって直線的に立ち上がり、底面はおおむね平坦である。東側はSD1009溝跡に向かって落ち込むような形状



6 SD1009溝跡（南より）



7 SD1009b溝跡 第2層上面（南より）

となっている。方向は北部では $N - 7^\circ - W$ である。検出した総長は 2.2m である。堆積土は 1 層である。遺物は出土していない。

SD1009溝跡に切られている。

SD2048溝跡 上幅 24~55cm、底面幅 10~20cm 程、深さ 30~45cm 程で、断面形は逆台形の溝跡である。壁は傾斜をもって直線的に立ち上がり、底面はおおむね平坦であるが鋤先状の痕跡の凹凸がある。方向は西部では $E - 3^\circ - N$ であるが、東部では $E - 7^\circ - N$ となる。検出した総長は 6.8m である。堆積土は 1 層である。

遺物は小型で底部の極めて小ぶりな赤焼き土器 D-81 壺（第14図 5）、底部切り離し技法が回転糸切り無調整の須恵器 E-474 壺（第14図 8）、E-475 壺（第14図 7）、平瓦片 13 点、丸瓦 1 点、その他の瓦片 3 点、多数の土師器、須恵器、赤焼き土器の小片が出土している。また底面よりは須恵器壺片が出土している。

SD2054溝跡、SK2072土坑を切り、SD1009溝跡に切られている。

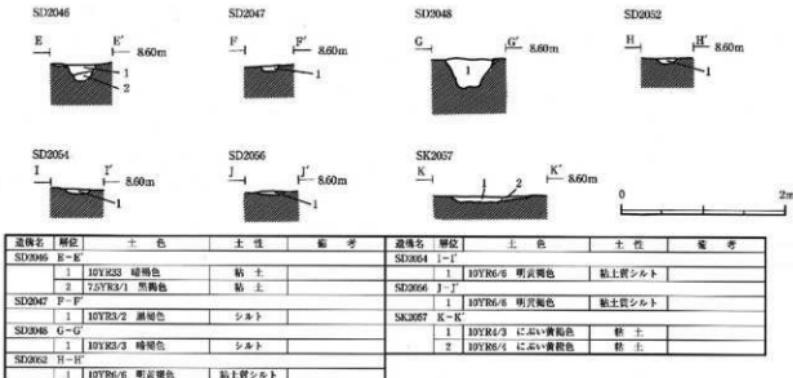
SD2052溝跡 上幅 20~30cm、底面幅 10~20cm 程、深さ 5cm 程で、断面形は逆台形の溝跡である。遺構の上部が削平されているため断続的な溝跡である。底面はおおむね平坦である。方向は西部では $N - 1^\circ - E$ である。検出した総長は 6.5m である。堆積土は 1 層である。

遺物は瓦片、土師器の小片が少量出土している。

SB2025掘立柱建物跡、SD1009溝跡に切られている。SK2072土坑との重複は確認されなかった。

SD2054溝跡 上幅 25~40cm、底面幅 20~25cm 程、深さ 5cm 程で、断面形は逆台形の溝跡である。遺構が削平されているため壁の立ち上がりの形状は明らかではない。底面はおおむね平坦である。方向は西部では $N - 30^\circ - W$ である。検出した総長は 2m である。堆積土は 1 層である。遺物は出土していない。

SD2048溝跡に切られている。



第11図 第146次調査A区溝跡・土坑断面図(1/60)

SD2056溝跡 上幅30~35cm、底面幅15~30cm程、深さ5cm程で、断面形は逆台形の溝跡である。遺構が削平されているため壁の立ち上がりの形状は明らかではない。底面はおおむね平坦である。方向は西部ではN-31°-Wである。検出した総長は4.8mである。堆積土は1層である。

遺物は土師器の小片が1点出土している。

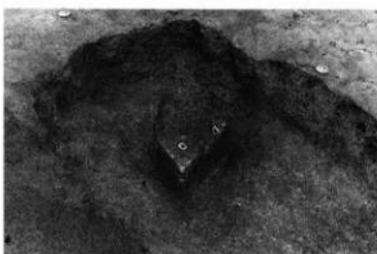
SD1009溝跡に切られている。

SK2053土坑 長軸170cm以上、短軸75cm程の楕円形の土坑と推定され、深さは40cm程である。壁は直立気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。方向は長軸でN-21°-Eである。埋土は3層である。

遺物は土坑の北部から金銅製のN-117・118耳環(第14回12、13)が15cm程離れて出土し(写真8)、底面よりは土師器の小片が1点出土した。なおこの検出時に直上から外表面が漆仕上げされたと見られる(註2)口縁部と体部の境に屈曲があり内外面ミガキ調整された土師器C-939杯(第14回11)が出土し(写真24)、この土坑に伴っていた可能性が高い。

SD1009溝跡に切られる。

SK2057土坑 長軸100cm、短軸65cmのゆがんだ形状の土坑で、深さは7cm程である。壁は緩やかに立ち上がり、底面はやや凹凸がある。堆積土は2層である。遺物は出土しなかった。



第12図 SK2053土坑断面図(1/60)

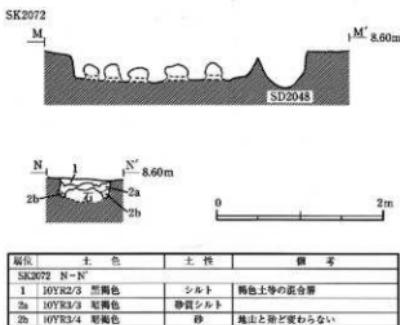
8 SK2053遺物出土状況



10 SK2072 全景（南より）



9 SK2072断面（南より）



第13図 SK2072土坑断面図(1/60)

SK2072土坑 長軸220cm程、短軸55~60cm程の隅丸長方形の土坑で、深さは25~30cmである。壁は直立気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。方向は長軸でN-26°-Eで、埋土は3層である。底面に人頭大の河原石5石が長辺を横にして並んで配置されている（写真10）。

遺物は第3層より土師器の小片が1点出土している。

SD2052溝跡を切り、SB2025掘立柱建物跡、SD2048溝跡に切られている。

SX2066性格不明遺構 調査区A区の南壁ぎわで遺構の一部を発見した。詳細については不明である。

遺物は土師器の小片が出土している。

SD1009溝跡を切る。

SA1850材木列 東西に延びる材木列であり、東に隣接する平成11年度の第128次調査で検出したSB1880門跡に取り付くSA1850材木列の延長部分と考えられる。方向はE-0°-S（真東西）である。上幅40~60cmで、抜き取りが施され、その下層より掘り方と直径10~15cmの柱痕跡が連続して検出された。検出した掘り方総長は約12.6mである。柱材の深さや材先端の形状は一定していない。

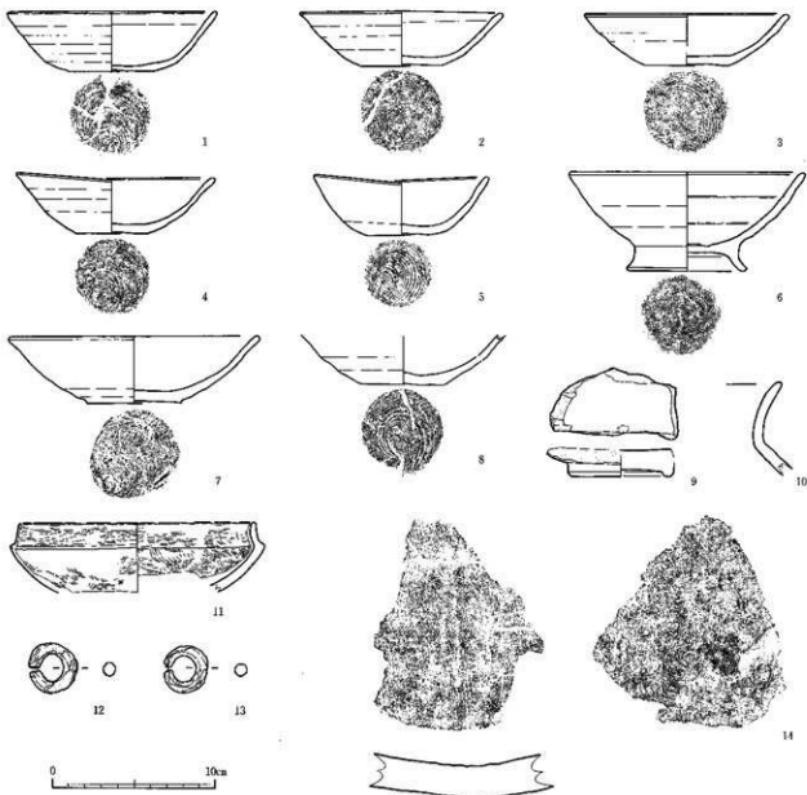
遺物は抜き取りより須恵器変片、土師器の小片が少量出土している。

SI2073竪穴住居跡、SX2074性格不明遺構を切り、SD1009溝跡に切られている。

SD2049溝跡 平面形が逆「コ」の字型の溝跡である。上幅35~45cm、底面幅20~30cm程、深さ20~25cm程で、断面形は逆台形の溝跡である。壁は傾斜をもって直線的に立ち上がり、底面はおおむね平坦である。方向は西部ではN-9°-E、北部ではE-1°-Sとなる。

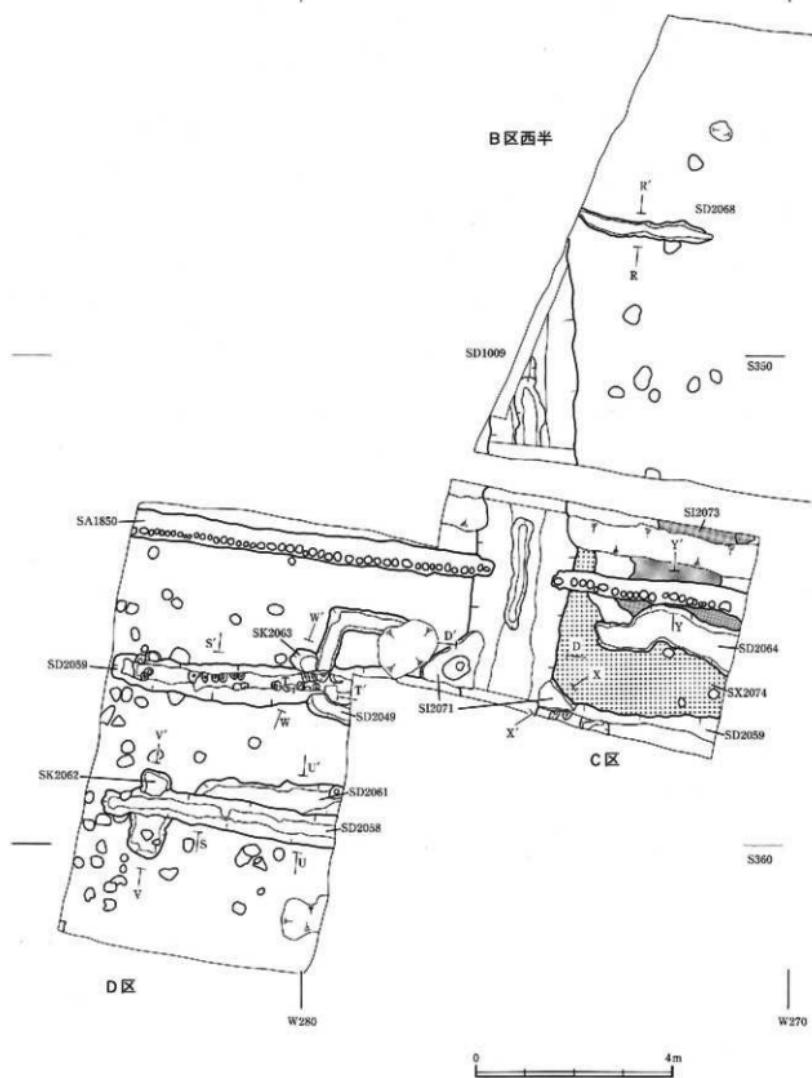
遺物は平瓦片が2点出土している。

SD2059溝跡を切っている。

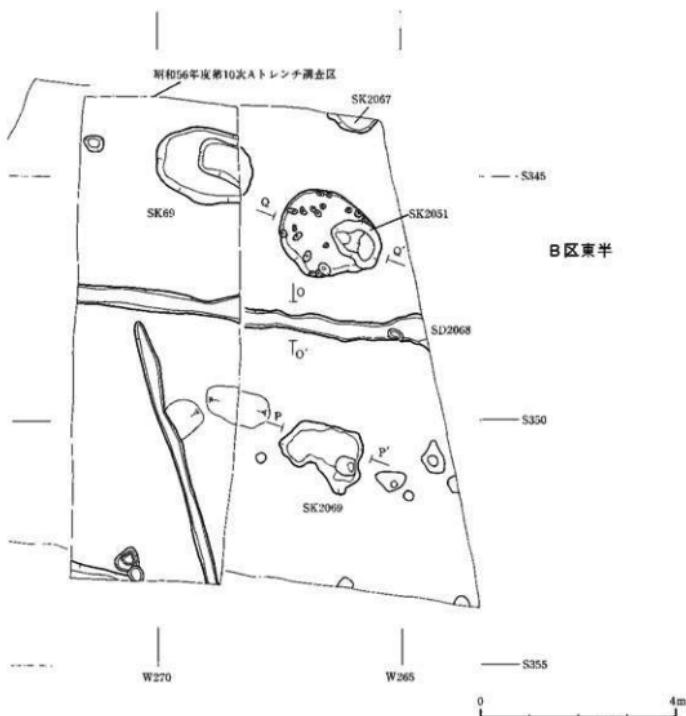


番号	器名	様式	器形	出土 地	出 土 層 位	法 寸 (cm)	外 面 圖 案	内 面 圖 案	備 考	以 下 記 載
1	D-88	赤燒土十唇	环	カクラン	腰高3.8 口径12.0 底径2.6	口縁12.0 底径2.6	口縁12.0 底径2.6	口縁12.0 底径2.6	ロクロナデ	57
2	D-82	赤燒土十唇	环	カクラン	腰高3.4 口径11.6 底径5	口縁11.6 底径5	口縁11.6 底径5	口縁11.6 底径5	ロクロナデ	56
3	D-83	赤燒土十唇	环	カクラン	腰高3.2 口径12.6 底径5.5	口縁12.6 底径5.5	口縁12.6 底径5.5	口縁12.6 底径5.5	ロクロナデ	56
4	D-80	赤燒土十唇	环	カクラン	腰高3.8 口径12.0 底径4.4	口縁12.0 底径4.4	口縁12.0 底径4.4	口縁12.0 底径4.4	ロクロナデ	54
5	D-81	赤燒土十唇	环	SD20048	腰高3.7 口径12.5~12.9 底径4	口縁12.5~12.9 底径4	口縁12.5~12.9 底径4	口縁12.5~12.9 底径4	ロクロナデ	52
6	D-92	赤燒土十唇	环	カクラン	腰高6.1 口径14.4 底径7.4	口縁14.4 底径7.4	口縁14.4 底径7.4	口縁14.4 底径7.4	ロクロナデ	59
7	E-475	儀面器	环	SD20048	1 腰高4.15 口径3.5	口縁3.5	口縁3.5	口縁3.5	ロクロナデ	51
8	E-474	儀面器	环	SD20048	1 腰高4.52~5.6	口縁4.52~5.6	口縁4.52~5.6	口縁4.52~5.6	ロクロナデ	50
9	J-12	罐	直	SD20048	1 直高12.7 底径4.9	底径4.9	底径4.9	底径4.9	丸のみ	53
10	C-940	上坪茶	直	SD20071	横存内4.7	口縁4.7	口縁4.7	口縁4.7	口縫部ナデ	58
11	C-939	十唇器	环	遺標後出面	残存高12.5 口径14.4	口縁14.4	口縁14.4	口縁14.4	口縫部ミガキ、修復ミガキ	内・外表面 連続なし
12	N-117	金張點	耳環	SK2003	太さ0.7~0.85 周囲0.2 口径14.4~17	口縁14.4~17	口縁14.4~17	口縁14.4~17	丸形(東)	46
13	N-118	金張點	耳環	SK2003	1b 太さ0.7 周囲0.2 口径14.4~16	口縁14.4~16	口縁14.4~16	口縁14.4~16	丸形(西)	47
14	G-116	瓦	平瓦	SD20051W4	柱穴	凸凹切込みのちり出し痕跡、白山を口痕、縁毛も、タガ痕跡	柱穴	柱穴	柱穴	19

第14図 第146次調査区出土遺物



第15図 第146次調査B・C・D区平面図 (1/100)



第16図 第146次調査B区東平面図(1/100)

SD2058溝跡 上幅50~70cm、底面幅20~25cm程、深さ30cm程で、断面形は逆台形の溝跡である。壁は傾斜をもって直線的に立ち上がり、底面はおおむね平坦である。方向はN-0°-E(真北方向)である。検出した総長は4.8mである。堆積土は2層である。

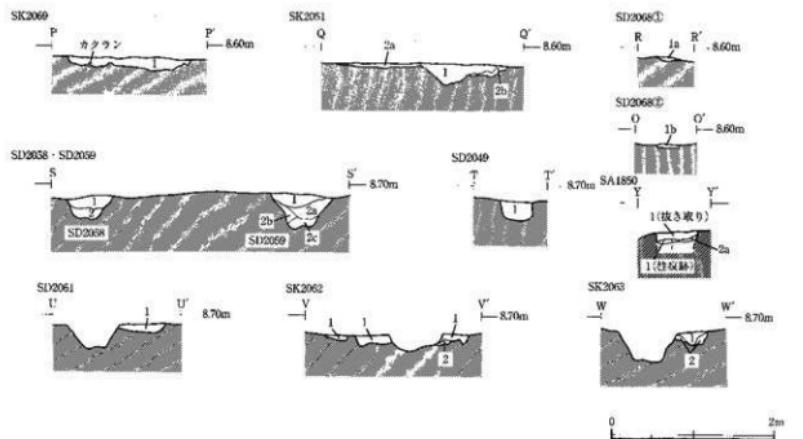
遺物は第1層から平瓦片5点、土師器小片、中形の罐などが出土している。

SD2061溝跡、**SK2062上坑**を切っている。

SD2059溝跡 上幅60~80cm、底面幅20~30cm程、深さ40~45cm程で、断面形は逆台形の溝跡である。壁は傾斜をもって直線的に立ち上がり、底面からは錐先痕跡が明瞭であるが、おおむね平坦である。方向は西部ではE-3°-Nであるが中央部から東部ではやや屈曲気味となる。C区からD区にかけて検出した総長は12.4mである。堆積土は2層である。

遺物は第1層中から高台の付く磁器J-12皿(第14図9)、土師器、須恵器、瓦片、罐が少量と、第2層中から土師器、瓦、中形の罐が少量出土している。

SI2071堅穴住居跡、**SK2063上坑**、**SX2074**性格不明遺構を切り、**SD1009溝跡**、**SD2049溝跡**に切られている。



地名	層位	土色	土性	層号	地名	層位	土色	土性	層号
SK2069 P - P'	1 10YR2/2 黄褐色	シルト質粘土	瓦片を少含む		SD2051 T - T'	1 10YR2/2 黄褐色	シルト	黄褐色を含むにブロック状	
Q - Q'	2a 10YR2/3 黑褐色	シルト			SD2051 U - U'	1 10YR2/2 黑褐色	粘土質シルト	黄褐色を含む少含む	
J 10YR2/3 黑褐色	シルト			SK2062 V - V'	1 10YR2/1 黑褐色	シルト質粘土	淡褐色をシルトをブロック状に含む		
2a 10YR2/3 黑褐色	シルト	堆山がまじる		2 10YR2/6 黑褐色	シルト質粘土	黑褐色を含む少含む			
2b 10YR2/3 黑褐色	粘土質シルト	において黑色鉄質シルトを薄アースに含む		SK2062 W - W'	1 10YR2/2 黑褐色	粘土質シルト			
1a 10YR2/2 黄褐色	粘土質シルト			2 10YR4/2 黑褐色	シルト質粘土				
SD2058 O - O'	1b 10YR5/3 ないし黄褐色	粘土質シルト		SA1850 Y - Y'	1 10YR4/2 黑褐色	粘土質粘土	黒褐色を含む少含む		
SD2058 - 2059 S - S'				2 10YR4/2 黑褐色	シルト質粘土				
SD2058 1 10YR2/2 黑褐色	粘土質シルト	黄褐色をシルトをブロック状に含む		1 10YR4/2 黄褐色	シルト質粘土	黒褐色を含む少含む			
2 10YR2/2 黑褐色	粘土質シルト	粘土質粘土を多く含む		2 10YR4/3 ないし黄褐色	粘土	粘土質粘土			
1 10YR2/1 黑褐色	粘土	上		2a 10YR3/2 黑褐色	粘土質シルト	粘土質粘土			
2a 10YR2/2 黑褐色	粘土質シルト	黒褐色をシルトをブロック状に含む							
2b 10YR2/2 黑褐色	粘土質シルト	黒褐色をシルトを多く含む							
2c 10YR3/2 黑褐色	粘土質シルト	黒褐色をシルトを多く含む							

第17図 第146次調査区遺構断面図 (1/60)

SD2061溝跡 上幅60cm以上、底面幅30~50cm以上、深さ10cm程で、断面形は逆台形の溝跡である。壁はゆるやかに立ち上がり、底面はおおむね平坦である。方向はE - 5° - Nである。検出した総長は3mである。堆積土は1層である。

遺物は上部器の小片、平瓦片、中形の礫が出土している。

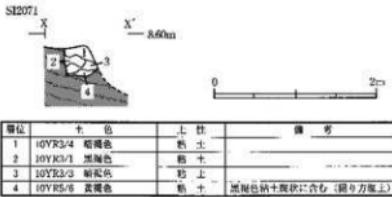
SD2058溝跡に切られている。

SD2064溝跡 上幅60~100cm、底面幅50~70cm程、深さ10cm程で、断面形は逆台形の溝跡である。壁は直線的に立ち上がり、底面はおおむね平坦である。検出した総長は2.9mである。堆積土は1層である。

遺物は上部器の小片、割れた中形の礫が出土している。

SD2068溝跡 昭和56年度調査の第10次調査Aトレンチで検出した遺構の延長部分である。上幅25~60cm、底面幅5~45cm程、深さ10cm程で、断面形は逆台形の溝跡である。壁は傾斜をもって直線的に立ち上がるが、遺構の削平が著しい。底面はおおむね平坦である。方向はE - 0° - S (真東西)である。検出した総長は10mである。遺物は出土していない。

SI2071堅穴住居跡 東西2.4m以上、南北2.2m以上の堅穴住居跡である。方向は西壁でN - 50° - Eである。床面までの深さは15cmほどである。床面から主柱穴と考えられる長軸60cm、短軸40cmの楕円形の掘り方とそのほぼ中



第18図 SI2071豎穴住居跡断面図(1/60)

央部に直径15cmの柱痕跡を検出した。

遺物は床面より口縁部が「く」の字状に屈曲し、体部外側がハケメ状の細いナデ痕跡があり、内面下半が輪積痕跡が顕著な体部片が接合すると推測される土師器C-940甕(第14図10)、貫通穿の穿たれた直径7ミリ程のK-275玉や、扁平な河原石が出土している。また掘り方埋土中よりも土師器の小片が出土している。

SD1009溝跡、SD2059溝跡に切られている。

SI2073豎穴住居跡 耕作により著しく削平され、掘り方と焼面の一部が残存している。遺物は出土していない。

SA1850材木列、SD2064溝跡に切られている。

SK69土坑 昭和56年度調査の第10次調査Aトレンチで検出した遺構の一部である。長軸2m程、短軸1.5m程の楕円形の土坑で、深さは20cm程で、東部にはさらに40cm程下がる落ち込みがある。壁は削平されているためほとんど立ち上がらないが、落ち込み部分は直立気味となっている。堆積土は1層である。

SK2051土坑 長軸2.1m、短軸1.8mのやややがんだ土坑で、深さは10cm程でさらに東部は20~50cm程下がる落ち込みがある。壁は削平されている箇所では立ち上がりが認められないが、東部では直線的に傾斜を持って立ち上がる箇所がある。堆積土は2層である。

遺物は土師器片が2点出土している。

SK2062土坑 長辺175cm、短辺75cmの隅丸長方形の土坑で、深さは10~12cmである。壁は北部は直線的に立ち上がるが、南部では極めて緩やかに立ち上がる。底面は凹凸がある。堆積土は2層である。

遺物は割れた中形の罐が出土している。

SD2058溝跡に切られている。

SK2063土坑 長軸55cm以上、短軸45cm以上の楕円形の土坑と推定され、深さは30cm程である。壁はほぼ直線的に立ち上がり、底面はおおむね平坦である。堆積土は2層である。

遺物は平瓦片、土師器の小片が各1点出土している。

SD2049溝跡、SD2059溝跡に切られている。

SK2067土坑 調査区B区の北東隅で遺構の一部を発見した。詳細については不明である。

遺物は平瓦片が1点出土している。

SK2069土坑 長軸160cm、短軸80~140cmの不整円形の土坑で、深さは20~45cm程である。壁は直立気味に立ち上がり、底面には凹凸がある。堆積土は1層である。

遺物は第1層より鰐尾H-30の小破片、土師器小片、平瓦片、罐が少量出土している。

SX2074性格不明遺構 調査区C区の東部で遺構の一部を発見した。SD2059溝跡やSD1009溝跡の断面で観察すると深さ10cm以上の籠所もあり、堅穴住居跡か整地等の痕跡の可能性がある。詳細については明らかにできなかつた。

SA1850材木列、SD1009溝跡、SD2059溝跡に切られている。

またこの他に表上中よりロクロ使用の土師質で土器表面に鉢底状の付着物のあるD-79壺¹¹(写真69)や、炉壁状の粘土が着いたN-116鉄滓(写真60)が出土している。また第Ⅲ層中よりやや大型の赤焼き土器で内面に輪積み痕跡の明瞭なD-92高台付壺(第14図6)が、擾乱(樹痕)より小型の赤焼き土器D-80、82、85、88壺(第14図4、2、3、1)が出土している。



11 第146次調査A区全景（東より）



12 第146次調査A区全景（南より）



13 SB2025建物跡（南より）



14 第146次調査区全景（東より）



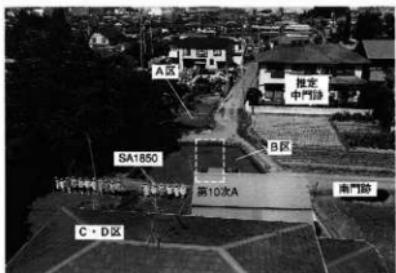
15 146次調査C区全景（南より）



16 第146次調査D区全景（東より）



17 SA1850材木列（東より）



18 第146次調査区周辺



19 第10次A トレンチ調査区（北より）—昭和56年—



20 第46次調査B区
東半（北より）



21 SD2046溝跡
(北より・A区)



22 SK2072土坑（東より）

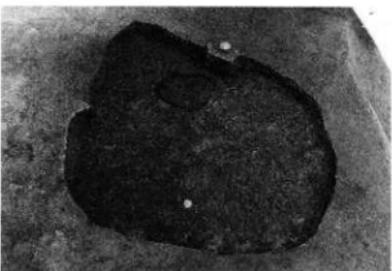


23 SK2072土坑とSB2025建物跡

24 SK2053土坑検出面出土遺物（C-939）



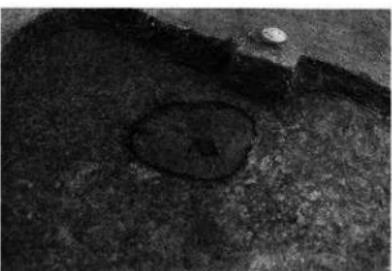
25 SK2053土坑（南より）



26 SB2025建物跡 S3W2柱穴



27 SB2025建物跡 S1W4柱穴



28 SB2025建物跡 S3W2遺物出土状況



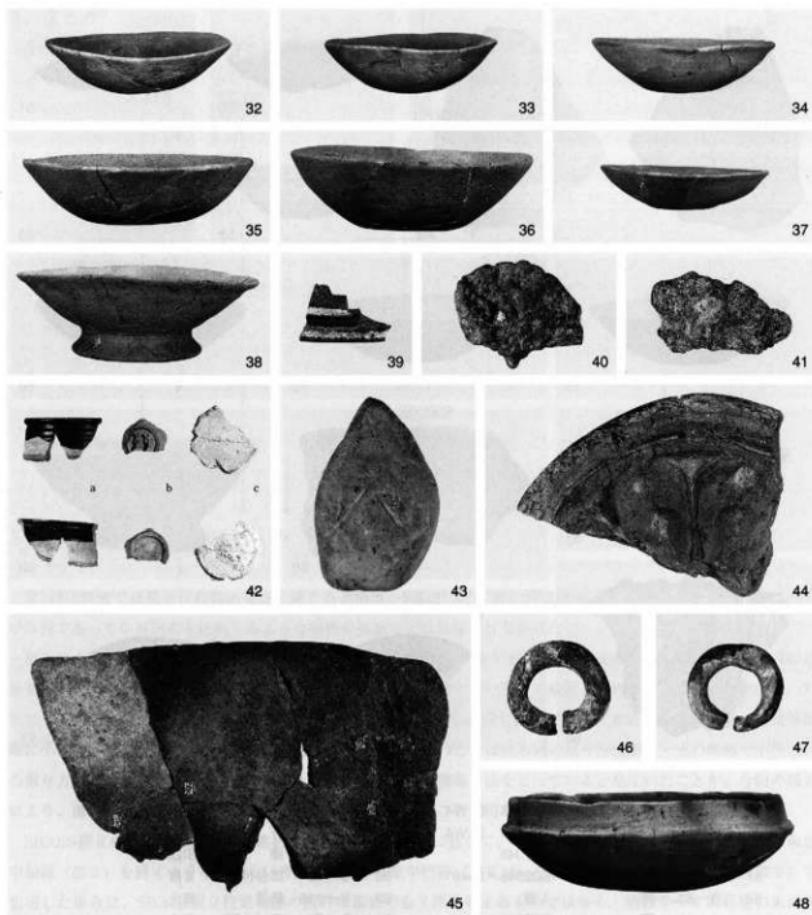
29 SA1850材木列掘り方検出状況



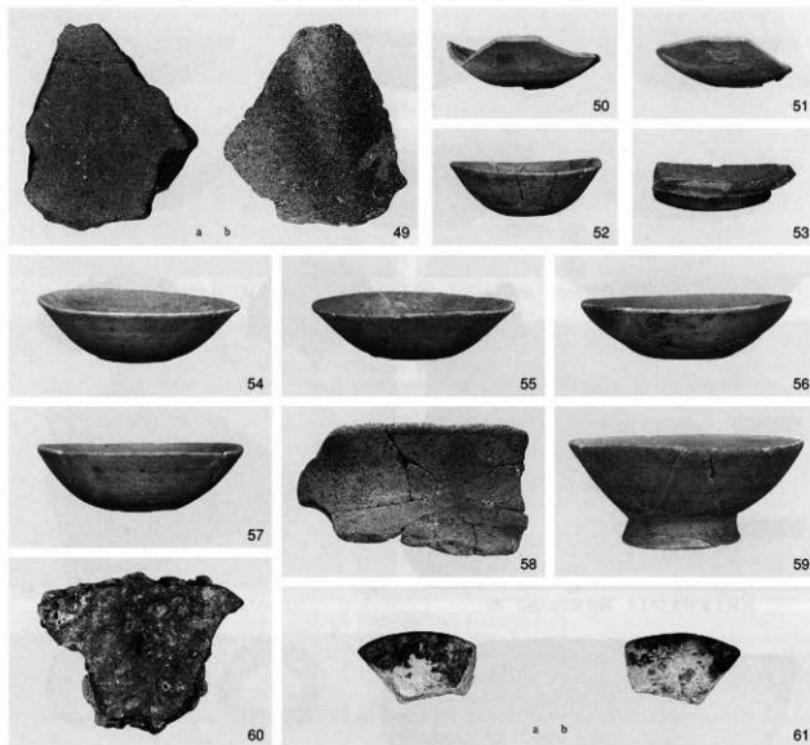
30 SA1850材木列抜き取り状況



31 SA1850材木列掘り方底面



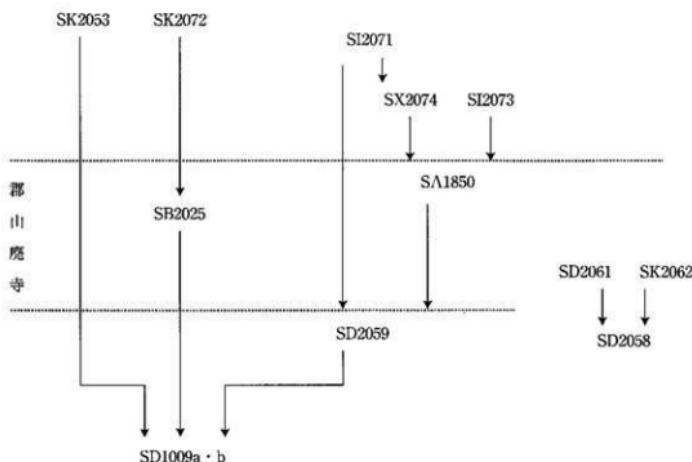
32 D-83 坏	SD1009a 1	42a I-53	SD1009b
33 D-84 坏	SD1009b 3a	b I-54	SD1009b
34 D-86 坏	SD1009b 3a	c I-55	SD1009b
35 D-87 坏	SD1009b 1	43 K-270 磨痕刻刀	SD1009b
36 D-89 坏	SD1009底面	44 F-96 轩丸瓦	SD1009b
37 D-90 坏	SD1009b 1	45 K-244	SD1009b
38 D-91 高台付环	SD1009a 1	46 N-117 耳环	SK2053 (東側)
39 E-476 円面鏡	SD1009b 4	47 N-118 耳环	SK2053 (西側)
40 N-114 鉄滓	SD1009b	48 C-939 坏	遺構検出面
41 N-115 鉄滓	SD1009b		



49a	G-116	平瓦 (凹面)	SB2025	S1W4	56	D-85	坏	カクラン
b	G-116	平瓦 (凸面)	SB2025	S1W4	57	D-88	坏	カクラン
50	E-474	坏	SD2048		58	C-940	甕	SI2071
51	E-475	坏	SD2046 · 2048		59	D-92	高台付坏	Ⅲ層
52	D-81	坏	I層		60	N-116	铁薄	表土
53	J-12	皿	SD2059 & 1		61a	D-79	坏 (内面)	表土
54	D-80	坏	カクラン		b	D-79	坏 (外面)	表土
55	D-82	坏	カクラン					

3.まとめ

今回発見された遺構のうち、主な遺構の重複関係は以下のようなものである。



第146次調査で発見された郡山廃寺に関わる遺構は、SA1850材木列とSB2025掘立柱建物跡である。今回の調査の目的であった中枢伽藍を区画するような迴廊や築地などは発見されなかった。

郡山廃寺南辺となるSA1850材木列は、平成11年度の第128次調査で検出したSB1880門跡に取り付く材木列の延長部分であり、ほぼ想定された位置で発見されている。この材木列の掘り方底面における柱材の深さや材先端の形状は一概していない。これは平成13年度の第133次調査で検出した同じ南辺での掘り方底面においては、ほぼ等間隔に小柱穴の掘り方が検出されていたのとは違いがある。このことは材木列の掘り方底面に一定の間隔で小柱穴状の掘り方を掘り、材を据えてその間に材木を充填するような構築方法をとっていると見ていたことが、今回の調査により、南辺の材木列は地点によって構築方法に違いがあることが明らかになった。

SB2025掘立柱建物跡は東西棟の建物跡であり、さらに東に延びていく。南門跡や講堂基壇から推定された仮想中袖縫（註3）を跨ぐような遺構とは考えがたく、推定中門跡（写真18）を多賀城廃寺跡と同等の規模（註4）で想定した場合は、SB2025掘立柱建物跡の桁行は最も長でも7間を越えるものではなく、桁行5～6間程度の東西棟建物跡と見られる。また複数の柱穴掘り方から平瓦の小片が出土していることから、郡山廃寺の創建期まで遡る建物跡ではないと考えられる。これは柱痕跡上部からロクロ使用の土師器片が出土していることからも言えることで、郡山廃寺の終末の問題にも関わるが、ロクロ使用の土師器が存在した時期まで寺院内の建物が存続していたことを窺わせることになろう。

なおSB2025掘立柱建物跡の南桁行の方向はE-3°-Sで、南辺となるSA1850材木列がE-0°-Sの真東西方向を示すとのは微妙な違いを見せている。そのため材木列とSB2025S1W1柱穴間の距離は26.7mであるが、S1W5柱穴間の距離は26mとなっている。SB2025東端の柱穴との距離はおそらくさらに短くなっているのであろう。したがって南辺材木列が創建期の遺構とした場合、SB2025掘立柱建物跡は別時期に建てられたと見られ、創建期の後に付加されたと見るべきであろう。

今回発見された土坑のうちSK2053土坑とSK2072土坑が他の土坑とは特徴を異にしている。SK2053土坑からは土坑内の北部から金剛製の耳環2点が15cm程離れて出土している。対になって出土していること、出土位置からは人頭大の距離を保って出土しているため、遺体と共に埋葬されたと見ることができ、SK2053土坑が墓坑であった可能性が高い。なお遺構の検出面上からは関東地方の古墳時代の土師器編年で鬼高式とされる特徴を示す坏(C-939)が出土し、土坑に伴っていたと考えられる。

またSB2025掘立柱建物跡に切られるSK2072土坑からは、底面に河原石5石が長辺を横にして並んで発見された。土坑の人さや河原石の頂部の高さが揃っていることなどから、木棺が直葬されその棺座のように使用された可能性がある。先述のSK2053土坑の長軸方向がN-21°-Eで、SK2072土坑もN-26°-Eとなっており、ほぼ同方向をむいている。ともにII期官衙造以前の土坑墓である可能性があり、郡山廃寺の創建される以前の墓域として使われていた地図(註5)である可能性が出てきた。

第146次調査区を縦断するSD1009a・b溝跡は、昭和61年度の第66次調査区で遺構の一部を検出していた。その際には溝中より瓦が出土していることから、古代の遺構として報告されている(註6)。今回の調査でもb期の第2層より多量の瓦と河原石が出土していた。しかしその他に赤焼上器や陶磁器片(註7)が出土し、それらの年代観からは16~18世紀までのものが含まれている。近世まで溝として機能していたものと考えられ、さらにその溝跡のb期で上層が埋没する時に多量の瓦と河原石とが投棄されたものである。周辺に河原石を含むような土層がないことから、これらの河原石は人為的に運ばれてきたものである。ともに出土している瓦は小破片であるが、これまで郡山廃寺から出土している瓦と同じ特徴を示している。これらが溝中に面をなして集積しているということは、溝中に投棄されるまで周辺の地表に残されていたことを示すものであり、礎石建物跡の根石や耕作中に細片となつた瓦としてそれまで残存していたものではないだろうか。それが近世後半の一時期のうちに溝中に投棄されたものと想定されよう。

註1 これら陶磁器片についてはI-53は16世紀と推定される鉄輪された瀬戸美濃香炉、I-54は17世紀前半と考えられる志野織部碗または鉢、I-55は17世紀前半と考えられる鉄輪が施された志野織部皿、I-56は17世紀前半から18世紀と考るされる透明釉が施された肥前碗、I-57は17世紀後半と推定されるハケメ紋唐津大鉢、その他17世紀の岸窯系の香炉片などが含まれているという見解を仙台市博物館 佐藤洋氏よりいただいた。

註2 水崎正春「鹿沼市福荷塚遺跡出土品の材質と技法」『栃木県埋蔵文化財調査報告第84集 福荷塚・大野原』栃木県教育委員会 1987

水崎正春「漆仕上げ土器について」『東令市久我台遺跡』(財)千葉県文化財センター 1988

註3 本書 P53・54 第34回 遺跡南部遺構配置図参照

註4 宮城県教育委員会・多賀城町「多賀城跡調査報告書I - 多賀城廃寺跡 -」1970.3

多賀城廃寺跡の中門跡は八脚門で、桁行長11.284mである。

註5 仙台市文化財調査報告書第169集『郡山遺跡XIII - 平成4年度発掘調査概報 -』1993.3

第96次調査で古墳の周溝状の溝跡が発見されていた。I期官衙、II期官衙の遺構に切られていた。

註6 仙台市文化財調査報告書第96集『郡山遺跡VI - 明和61年度発掘調査概報 -』1987.3

VII 第66次調査 P69~75

註7 註1と同じ

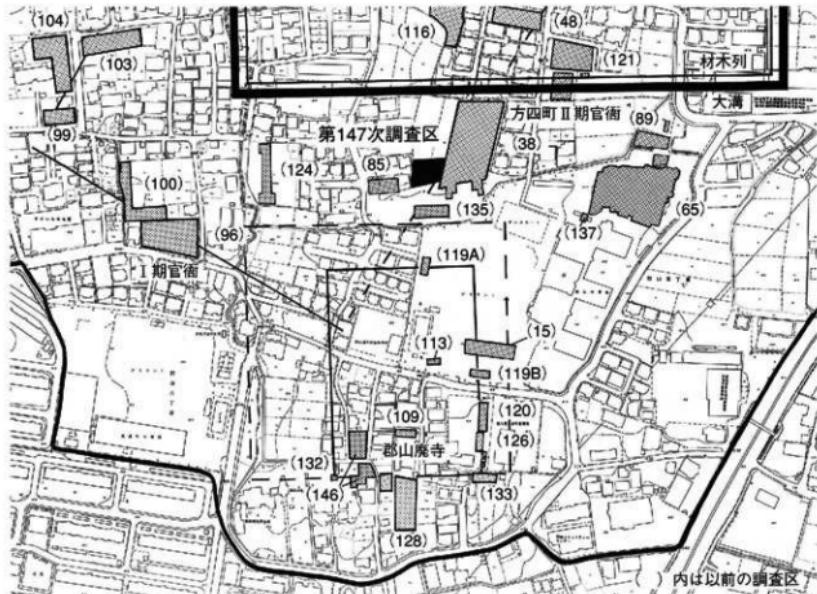
V 第147次発掘調査

1. 調査経過

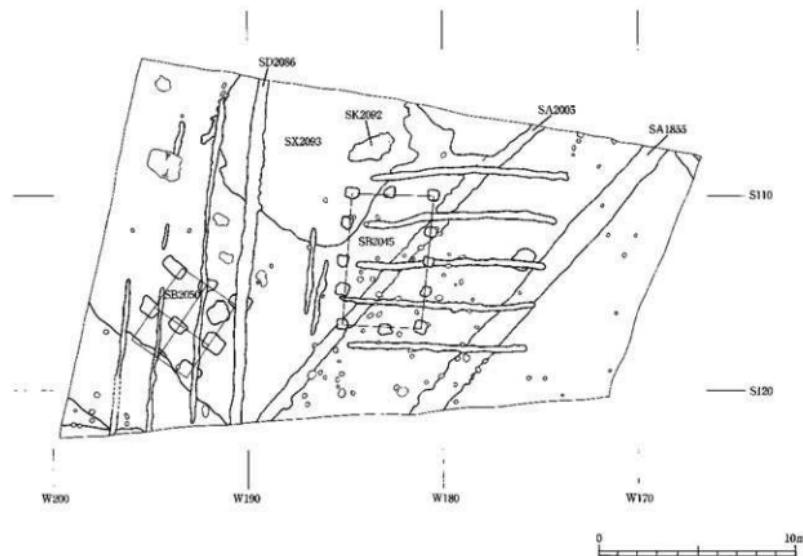
第147次調査区は昨年度調査を実施した第138次調査区に隣接し、方四町Ⅱ期官街と郡山廃寺の間に広がる南方官街西地区の中に位置している。昨年度までの調査で、方四町Ⅱ期官街外郭となる材木列と大溝の外側の様相は、西辺と南辺では大溝と並行するほどの同規模な溝跡（＝外溝）があり外郭との間に約50mの空闊地を形成していた。南方官街地区は、この「外溝」を境に南に位置し、官街の中枢部に配置されるような建物と同等の構造や規模をもつ大型の建物が配置されている。方四町Ⅱ期官街のみならずその外側にも重要な官街ブロックが広がっている地区である。今年度は昨年度の第138次調査で発見されたような大型の建物が立ち並ぶのかどうかを確認するため第147次調査を実施した。調査区の現況は、旧水田で仙台市土地開発公社の所有地となっている。今回は第85次調査で発見されたSB1277掘立柱建物跡と昨年度の調査（第138次）で発見されたSB2010・2015掘立柱建物跡の間に約470m²の調査区を設定して実施した。しかし今年度急遽個人住宅建築に伴う第148次調査を実施する必要があったため、遺構認にとどめた。来年度に詳細な発掘調査を実施することにしている。そのため調査遺構配置図は遺構検出段階でのものである。

2. 発見遺構・出土遺物

今回の調査で発見された遺構は、掘立柱建物跡2棟、材木列2列、溝跡13条、土坑3基以上、性格不明遺構1、ピットなどである。これらの遺構は基本層位第II層上面で検出されている。表土（第I層）の厚さは10cm～20cmである。以下ここで報告するのは、第II層上面で検出された主な遺構である。



第19図 第147次調査区位置図



第20回 第147次調査遺構配図 (1/200)

SA1855材木列 I期官衙の遺構と見られる南北に延びる材木列で、東に隣接する昨年度の第138次調査区で検出したSA1855材木列の延長部分と考えられる。

SA2005材木列 I期官衙の遺構と見られる南北に延びる材木列で、東に隣接する昨年度の第138次調査区で検出したSA2005材木列の延長部分と考えられる。

SB2045掘立柱建物跡 切られている。

SB2045掘立柱建物跡 東西梁行2間（推定総長4.2m）、南北桁行4間（推定総長6.9m）の掘立柱建物跡である。柱穴は一辺70～140cm程の隅丸長方形である。

SA2005材木列、SX2093性格不明遺構を切る。

SB2050掘立柱建物跡 I期官衙の遺構と見られる東西2間（推定総長3.2m）、南北2間（推定総長3.9m）の掘立柱建物跡と見られる。柱穴は一辺80～130cm程の隅丸長方形である。

SD2086溝跡に切られている。

SD2086溝跡 南北に延びる溝跡で、調査区を縦断する。上幅50～80cm、検出総長は約18mである。

SB2050掘立柱建物跡、SX2093性格不明遺構を切っている。

SX2093性格不明遺構 調査区の北部で検出された遺構である。

遺物は第1層中から多量の上部器片、須恵器片、割れた河原石などが出土している。

3. まとめ

第147次調査ではこれまで南方官衙地区で発見されてきたような大型の建物跡は発見されなかった。SB2045掘立柱建物跡は、これまでのこの地区で発見された建物跡と比較すると規模が小さく、柱穴・掘り方も小規模である。

第147次調査の詳細については次年度の調査で明らかにしていくこととする。



62 第147次調査区全景（東より）



63 第147次調査区遺物出土状況（北より）

VI 第148次発掘調査

1. 調査経過

第148次調査は、仙台市太白区郡山三丁目9-18矢口正史氏より、仙台市太白区郡山三丁目33-6において住宅新築に伴う発掘届が、平成14年9月28日付けで提出されたことにより実施した。住宅の基礎工事の深度が遺構の検出面より深く、遺構が損なわれると想定されたためである。調査地は方四町Ⅱ期官衙北辺推定線上に位置するため調査以前から北辺材木列の検出が予想され、北辺のはば中央部にあたることから北門跡の検出も考えられた。これまで北辺の調査は住宅が密集した地域であるため、北辺材木列については配管工事などに伴う断面観察が主であった。本格的な調査については小規模ではあるが昭和56年度の第14次調査と昭和63年度の第79次調査を実施し、第79次調査において北辺の人溝とみられるSD617溝跡を検出していった。調査は住宅の建つ部分を対象に東西9m、南北8mの調査区を設定し、平成14年10月3日に表土排除を行った。

現況より深さ50cm程度で遺構を検出し、調査は10月31日に終了した。わずか72m²の調査区ではあるが、Ⅰ期官衙、Ⅱ期官衙さらに官衙以前の重要な遺構が良好な遺存状況で検出された。

2. 発見遺構・出土遺物

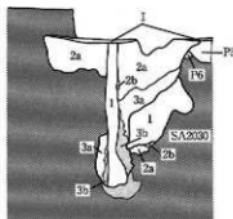
今回の調査で発見された遺構は、掘立柱建物跡1棟、材木列3列、溝跡1条、竪穴住居跡1軒、土坑8基、性格不明遺構2、ピットなどである。これらの遺構は基本層位第Ⅲ層上面で検出されている。第Ⅰ層は現代の整地層、第Ⅱ層は畑の旧耕作土と考えられる。以下ここで報告するのは、第Ⅲ層上面で検出された遺構である。

SA616材木列 東西に延びる材木列であり、上幅50~240cm以上の掘り方とそのばは中央部に直径15~30cmの柱痕跡が連続して30本分検出された。検出した総長は東西約9.15mである。方向はE-1°-Nであり、さらに東西方向に延びている。掘り方の深さは検出された上面より190cm程度で、柱痕跡は底面より上面まで立ち上がっている。抜き取りの痕跡は確認されなかった。堆積土は2層であるが柱痕跡周辺下部が白色に変色し粘土化している。



第21図 第148次調査区位置図

— 12.00m —



64 SA616断面

遺跡名	層位	土色	土粒	備考	遺跡名	層位	土色	土粒	備考
SA616					SA2030				
柱痕跡	1	10YR4/4 墓色	粘土	当遺跡に白色砂土、礫化砂が集積している	柱痕跡	1	10YR5/6 に赤い黄褐色	粘土質シルト	粘土質シルトをブロック状に含む
	2a	10YR5/4 に赤い黄褐色	粘土	黑色砂土を斑状に含む		2a	10YR7/6 黄灰褐色	粘土質シルト	粘土質シルトを少部分含む
	2b	10YR7/2 に赤い黄褐色	粘土	黑色砂土を含む		2b	10YR6/2 灰灰褐色	粘土	礫化砂が集積している
	3a	10YR6/3 に赤い黄褐色	粘土	白色砂土を斑状に含む	Pt5	1	10YR6/2 灰灰褐色	粘土質シルト	
	3b	10YR7/2 に赤い黄褐色	粘土	黑色砂土を含む	Pt5	1	10YR6/2 灰灰褐色	粘土質シルト	

第22図 SA616材木列断面図(1面)

遺物は掘り方埋土より羅平な擦痕、敲打痕のあるK-254砾石器(第28図10)、その他多数の土師器、須恵器の小片が出土している。柱痕跡よりも土師器、須恵器の小片が少量出土している。

SA2030材木列、SB2040掘立柱建物跡、SK2096土坑を切り、SD2076溝跡、SK2077土坑に切られている。

SA2030材木列 上幅55~90cmの溝状の抜き取り底面において、掘り方とその内部から直径20~25cmの柱痕跡が検出された。柱痕跡の深さは一定していない。柱痕跡より深い深度で抜き取りを受けている箇所も見られる。方向はE-30°-Sである。検出した総長は約10.8mである。

遺物は抜き取りより内面にミガキが施され、口縁部がやや内弯した土師器C-929坏(第28図2)、その他土師器片、須恵器蓋片などが出土している。

SB2040掘立柱建物跡を切り、SA616材木列、SD2076溝跡、SK2097土坑に切られている。

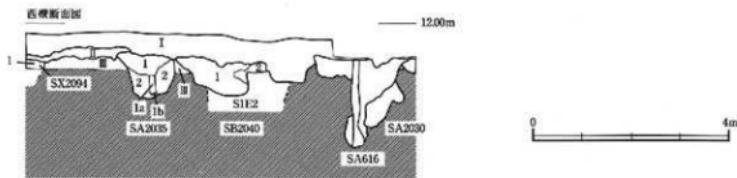
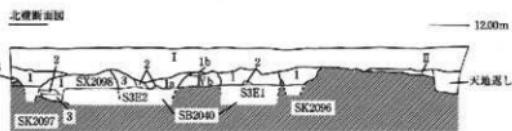
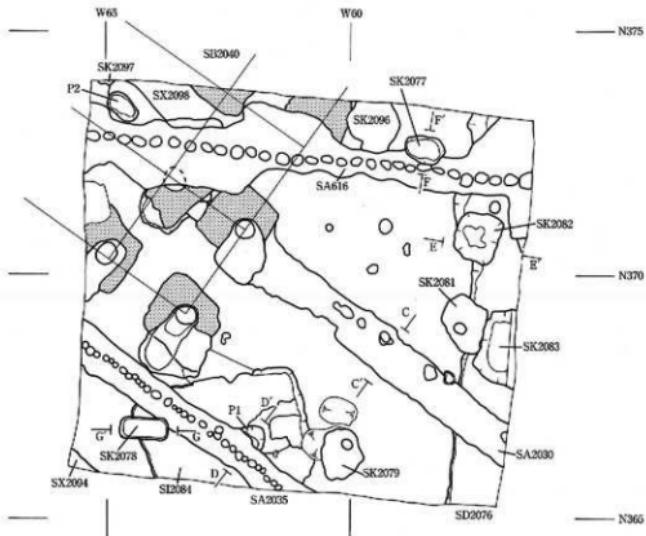
SA2035材木列 上幅60~70cmで、掘り方とそのほぼ中央部に直径10~20cmの柱痕跡が連続して検出された。柱痕跡底面の深さはほぼ一定している。方向はE-29°-Sである。検出した総長は約6mである。

遺物は掘り方より口縁部と外表面がヨコナデ調整され、黒色の土師器C-935坏片、その他少量の土師器の小片が、抜き取りよりも土師器の小片が少量出土している。

SI2084堅穴住居跡を切り、SK2078土坑、ピット1に切られている。

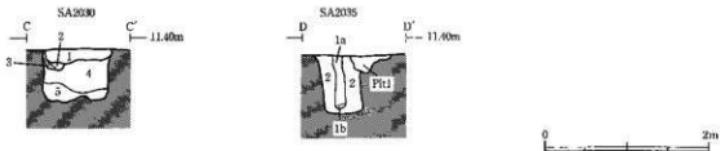
SB2040掘立柱建物跡 東西1間以上、総長205cm以上(柱間寸法205cm)、南北2間以上、総長420cm以上(柱間寸法210cm)の掘立柱建物跡である。方向は南柱列でE-28°-Sである。柱穴の掘り方はSIE1柱穴で150cm×135cm程の方形で、柱痕跡は直径40~45cmである。柱痕跡には抜き取りが施されている。

遺物は掘り方中ではSIE2より外表面が黒色処理され、口縁部の外表面にヨコナデが施され、体部外表面のハケメ



透視名	層位	土色	土性	備考	透視名	層位	土色	土性	備考
I	10YR4/2 灰青褐色	粘土質シルト	上部にコンクリート、石含む		SX2040	SSE2			
II	10YR5/4 に赤い黄褐色	シルト質粘土	田舎作土			1a	10YR6/2 灰黃褐色	粘 土	田舎土、黒化帯を含むが、黒化の程度は弱い
III	10YR7/6 明黄褐色	シルト質粘土	灰色粘土に少量を含む			1b	10YR6/5 明黄褐色	粘 土	焼き取り穴の可能性あり
B'a	10YR4/1 墓状色	粘 土				2	10YR6/3 に赤い黄褐色	粘 土	白色地ナ、黒化帯を多量に含む
B'b	10YR3/1 黑褐色	粘 土	細褐色土を複数り灰に含む			3	10YR6/6 明黄褐色	粘 土	黄褐色粘土をアロック灰に含む
SK2096	1	25Y7/4 淡灰褐色	粘 土	無色粘土をアロック灰に含む	SB2040	SIE2			
I	10YR7/6 明黄褐色	粘 土	無色粘土を少量含む			1	10YR3/4 に赤い黄褐色	粘 土	灰褐色粘土を斑状に含む
SK2097	1	10YR7/6 明黄褐色	粘土質シルト			2	10YR4/3 に赤い黄褐色	粘 土	
SX2098	2	10YR3/2 黑褐色	粘 土		SAX008				
	3	10YR5/6 明灰褐色	粘 土	黒褐色粘土をアロック灰に含む					
SX2004	1	10YR4/3 に赤い黄褐色	粘 土						
Pt5	2	10YR4/2 灰青褐色	粘土質シルト						
SB2040 SSE1	1	10YR4/3 に赤い黄褐色	粘 土	浅灰褐色粘土をアロック灰に含む					
	2	10YR4/3 に赤い黄褐色	粘 土	無色粘土を少部分含む					

第23図 第148次調査区・断面図(1/100)



遺物名	層位	土色	土性	備考
SA2030 C-C'				
抜き取り穴	1 10YR6/6 明黄色	粘土		
柱取跡	2 10YR5/2 淡黃褐色	粘土	白色粘土、無化鉄を含む	
3 10YR6/6 明黄色	粘土質シルト			
4 10YR6/4 に赤い黄褐色	粘土質シルト	黑色粘土をブロックで多量に含む		
5 10YR2/4 に赤い黄褐色	粘土	黑色粘土を含む		
SA2035 D-D'				
柱取跡	1a 10YR3/2 黑褐色	粘土		
1b 10YR2/2 に赤い黄褐色	粘土	底面に酸化鉄を含む		
掘り方	2 10YR4/3 に赤い黄褐色	粘土	明黄色粘土をブロック状に含む	
Pit 1	3 10YR4/3 に赤い黄褐色	粘土		

第24図 SA2030・SA2035木材列断面図(1/60)

調整が明瞭な土師器C-931不明品(第28図1)が出土し、その他にSIE1、SIE2、S2E1、S2E2の各柱穴より少量の土師器小片が出土した。抜き取り中ではS2E2より内外面が漆仕上げされたと見られる土師器C-937壺(第28図4)、SIE1より土師器壺底部、須恵器蓋片が、その他SIE1、SIE2、S2E1、S2E2の各抜き取りより少量の土師器小片が出土している。

SA616・2030材本列に切られている。

SD2076溝跡 上幅100~165cm以上、底面幅80~135cm以上、断面形は扁平な溝跡である。遺構が削平されているため壁の立ち上がりの形状は明らかではない。底面はおおむね平坦である。方向はN-1°-Wである。検出した総長は約8mで調査区の東壁ぎわを縱断する。堆積土は1層である。

遺物は堆積土中より小型で内面にカエリのある須恵器E-472壺(第28図8)、その他に土師器、須恵器の小片が少量と陶磁器の小片が2点出土している。底面よりも土師器、須恵器、焼瓦の小片が出土している。

SA616・2030材本列、SK2081・2082・2083土坑を切っている。

SI2084豊穴住居跡 東西350cm、南北250cm以上の豊穴住居跡である。方向は北壁方向でE-18°-Nである。床面までの深さは20~30cm程度である。カマドの痕跡は東壁中で確認されたが、ソデや天井部の構築土は残存せずソデの痕跡のみの検出で、煙道部も発見されなかった。

遺物はカマド周辺と床面からまとめて出土した。カマド北側の床面上からは、土師器C-933壺、C-918壺、カマド西側の前面からは土師器C-924壺、カマド南側の床面上からは土師器C-917壺が出土し、竪窓部付近の下から土師器C-923壺が、窓の口縁部付近の下からは土師器C-921壺、920壺、925壺、927壺の4点が重なって出土した。またこの4点の壺類の横(南)からは密着して土師器C-922壺が出土した。壺類については極めて良好な残存状況を示している。これらの土器の周辺からは割れ面のある礫が2点出土している。火然などを受けた痕跡はない。

これら出土した土器壺類は口縁部が直立または内寄する形態で、口縁部の内外面にヨコナデ、体部外面にヘラケズリが施される共通した特徴がある。各々の詳細な特徴を見ると土師器C-920壺(第26図1)は、口縁部がやや屈曲しながら直立気味となり、内面にヘラミガキが施されている。土師器C-921壺(第26図2)は口縁部がやや外側に屈曲し、内外面ともヘラミガキが施され、両面黒色処理された可能性がある。土師器C-925壺(第26図6)は口縁部が内寄気味となり、内面にヘラミガキが施されている。土師器C-927壺(第26図8)は、伴に出土した壺類では最も大型である。入れ子状に重ねられた4点(C-921、920、925、927)のうち最下部に位置してい



65 SI2084遺物出土状況

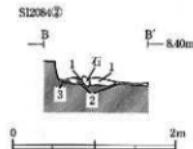
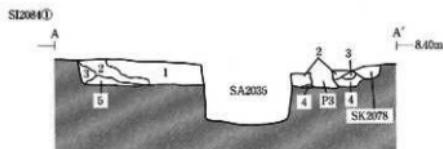
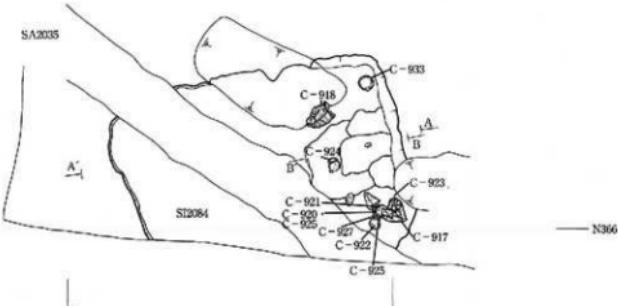


66 SI2084全景

W65

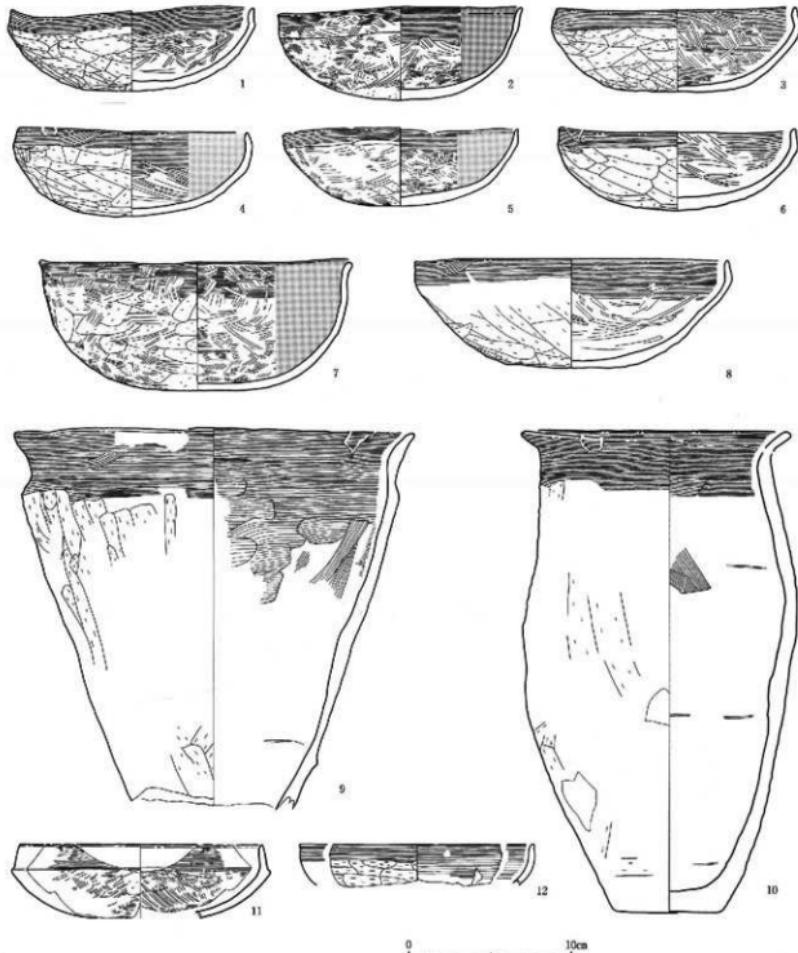
W61

N369



遺構名	部位	土色	土性	備考
SI2084①				
	1	10YR3/1 黒褐色	粘土	黄褐色粘土をブロック状に含む
	2	10YR3/3 にぶい黄褐色	粘土	黄褐色粘土を少量含む
	3	10YR7/3 にぶい黄褐色	粘土	
	4	10YR6/3 にぶい黄褐色	粘土	
	5	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土	炭化物・鐵土を含む
Pit 3	1	10YR3/3 にぶい黄褐色	粘土	黄褐色粘土を質点状に含む
SI2084②				
	1	75YR2/2 黑褐色	粘土	炭化物を含む
	2	10YR17/1 黑褐色	粘土	炭化物が中心で褐色土を含む
	3	10YR4/4 褐色	粘土	

第25図 SI2084堅穴住居跡平・断面図 (1/60)



編號	登録番号	新規	留形	出土施設	底盤	底盤 (cm)	外観測定	内面測定	種類	写真
1	C-922	土壁部	新	SI2084	床面	割幅: 270~310 床幅: 32~34	□縦断ヨコナギ 体割ヘラケズリ	□縦断ヨコナギ→ヘラカミヨリ 壁面ヘラカミヨリ	84	
2	C-921	土壁部	新	SI2084	床面	高さ37.5 口幅31.9	□縦断ヨコナギ→ヘラカミヨリ 壁面ヘラカミヨリ→ヘラカミヨリ	□縦断ヨコナギ 体割ヘラカミヨリ	85	
3	C-922	土壁部	新	SI2084	床面	高さ37.5 口幅31.9 床幅: 33	□縦断ヨコナギ 体割ヘラケズリ	□縦断ヨコナギ→ヘラカミヨリ 壁面ヘラカミヨリ→ヘラカミヨリ	86	
4	C-923	土壁部	新	SI2084	床面	高さ37.5 口幅31.9 床幅: 34~36	□縦断ヨコナギ 体割ヘラケズリ	□縦断ヨコナギ 体割ヘラカミヨリ	87	
5	C-921	土壁部	新	SI2084	床面	高さ37.5 口幅31.4	□縦断ヨコナギ 体割ヘラケズリ→ヘラカミヨリ	□縦断ヨコナギ 体割ヘラカミヨリ→ヘラカミヨリ	88	
6	C-925	土壁部	新	SI2084	床面	高さ35.6 口幅31.9 床幅: 34.25	□縦断ヨコナギ 壁面ヘラカミヨリ→ヘラカミヨリ	□縦断ヨコナギ→ヘラカミヨリ 壁面ヘラカミヨリ	89	
7	C-903	土壁部	新	SI2084	床面	高さ37.5 口幅31.7	□縦断ヨコナギ→ヘラカミヨリ 壁面ヘラカミヨリ	□縦断ヨコナギ→ヘラカミヨリ 壁面ヘラカミヨリ	90	
8	C-927	土壁部	新	SI2084	床面	高さ37.5 口幅30~33 床幅: 34	□縦断ヨコナギ 体割ヘラケズリ	□縦断ヨコナギ→ヘラカミヨリ 壁面ヘラカミヨリ	91	
9	C-917	土壁部	新	SI2084	床面	口幅31.6 高さ23	□縦断ヨコナギ 体割ヘラケズリ	□縦断ヨコナギ 体割ヘラカミヨリ	92	
10	C-918	土壁部	新	SI2084	床面	口幅32~33 床幅: 34~35 床幅: 36.4	□縦断ヨコナギ 体割ヘラケズリ	□縦断ヨコナギ→ヘラカミヨリ 壁面ヘラカミヨリ	93	
11	C-938	土壁部	新	SI2084	2	口幅31.9 高さ25	□縦断ヘラカミヨリ→ヘラカミヨリ 壁面ヘラカミヨリ→ヘラカミヨリ	□縦断ヘラカミヨリ→ヘラカミヨリ 壁面ヘラカミヨリ→ヘラカミヨリ	94	
12	C-928	土壁部	新	SI2084	1-1	口幅31.5 高さ25	□縦断ヨコナギ 体割ヘラケズリ	□縦断ヨコナギ 体割ヨコナギ	95	

第26図 SI2084 穴式住居跡出土遺物

た。土師器C-923坏（第26図4）は最も口縁部が内寄しているもので、内面は黒色処理されている。土師器C-922坏（第26図3）は、口縁部がやや直線的に内傾するもので、内面の口縁部と体部の境に稜を有するものである。土師器C-924坏（第26図5）は、他の坏に比べ短い口縁部で直立気味となり内面黒色処理されている。土師器C-933坏（第26図7）は器面調整では他の坏とはほぼ同じ特徴を有し、両面黒色処理されている。C-921、923坏に比べると発色が薄くやや粗いものである。

この他に土師器C-917坏（第26図9）は口縁部の内外面にヨコナデが施され、体部外側がヘラケズリされたものである。土師器C-918坏（第26図10）は、長胴型で最大径が体部中央にあるものである。

堆積土中よりは口縁部の内外面がヨコナデされ、体部外側がヘラケズリされた土師器C-928坏（第26図12）や、器面の特徴からC-928坏と同一個体の可能性のある土師器C-930坏（写真95）が出土している。また内外面が漆化上げされたとみられる土師器C-938坏（第26図11）や形態的特徴がよく似た土師器C-936坏（第28図3）などが出土している。

SA2035材木列、SK2078土坑に切られている。

SK2077土坑 東西85cm、南北55cmの土坑で、深さは10cm程度である。壁は北側では直線的に立ち上がり、南側では緩やかに立ち上がる。底面はおおむね平坦である。堆積土は1層である。

遺物は土師器の小片が少量出土している。

SA616材木列を切っている。

SK2078土坑 長軸95cm、短軸45cmの長方形の土坑で、深さは15cm程度である。壁は直線的に立ち上がり、底面はおおむね平坦である。堆積土は1層である。遺物は出土していない。

SA2035材木列、SI2084柱穴居跡を切っている。

SK2079土坑 東西85cm、南北110cmの不整形の土坑で、深さは75cm程度である。壁は直線的に立ち上がり、底面はおおむね平坦である。底面より柱痕跡が検出されたことから柱穴となる可能性がある。堆積土は1層である。

遺物は土師器、須恵器の小片が少量出土している。

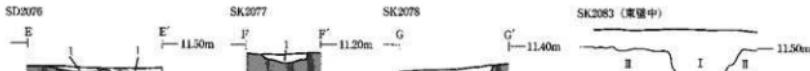
SK2081土坑 東西95cm、南北125cmの不整形の土坑で、深さは35cm程度である。壁は直線的に立ち上がり、底面はおおむね平坦である。底面より柱痕跡が検出されたことから柱穴となる可能性がある。堆積土は1層である。

遺物は土師器壺片の他に土師器、須恵器の小片が少量出土している。

SD2076溝跡に切られる。SK2083上坑との重複は確認されなかった。

SK2082土坑 東西90cm、南北100cmの方形の土坑で、深さは40cm程度である。壁は緩やかに立ち上がり、底面はおおむね平坦である。堆積土は1層である。

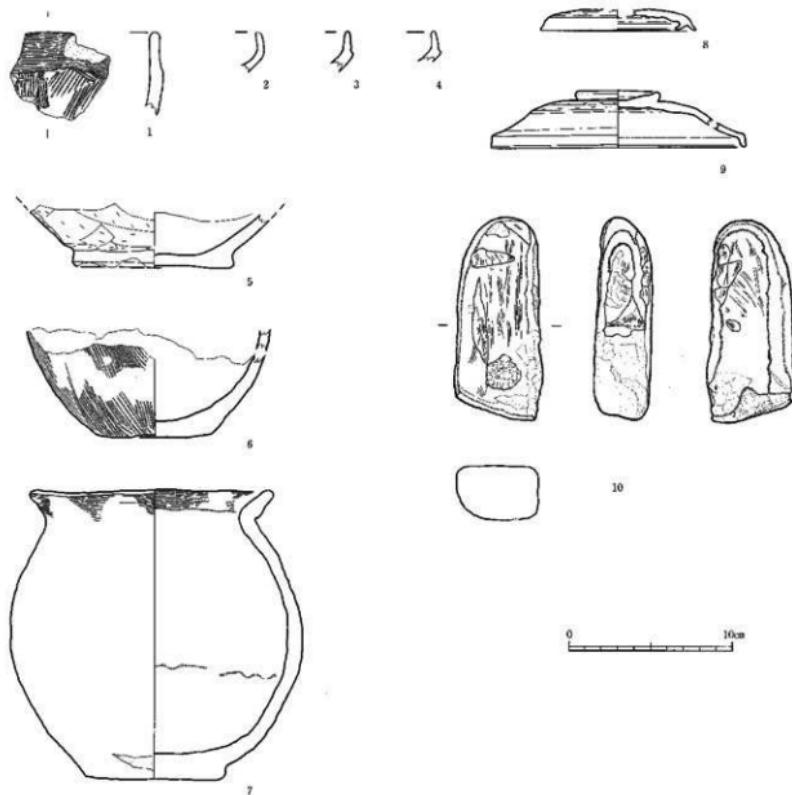
遺物は土師器の小片が少量出土している。



0 2m

遺跡名	層位	上色	上性	質
E-E'				
SD2076	I	10YR5-4 10YR6-3	にせい 黒褐色 にせい 黑褐色	粘土質シルト 粘土
SK2082	I			
F-F'				
SK2077	I	10YR3-3	暗褐色	シルト
G-G'				
SK2078	I	10YR3-3	暗褐色	シルト 海生土を組かいブロックで含む
底盤中				
SK2083	I	10YR5-4	にせい 黑褐色	粘土質シルト 基本層底付、日層をブロック状に含む

第27図 第148次調査断面図 (1/60)



番号 番号	器種 分類	種別 形	器形	出土場所		深 底 (cm)	外観同定	内面同定	備考	当属 期段
				出土遺物	層位					
1 C-931	土器	不規	不規	SH2049 SI1	鋪り方	口徑 (15.6) 番号S4	口縁ヨコナデ 体部ミガキ。ハケナ	口縁ヨコナデ 体部ミガキ。ハケナ	内外面黑色處理	102
2 C-929	土器	片	片	SA2030	1	無	二輪部ヨコナデ 体部ミガキ	二輪部ヨコナデ 体部ミガキ	山形縣ミガキ	101a
3 C-936	土器	片	片	SD2084	2	底外底 (2.6)	二輪部ヨコナデ 体部ケズリ	口縁ヨコナデ 体部ミゼキ		101b
4 C-107	土器	片	片	SD2090 SD202	特徴未定	残断片 (2)	二輪部ヨコナデ 体部ケズリ	口縁ヨコナデ	初期乳母 (うもしや) 101a	
5 C-926	土器	片	片	無	底	底6	底部ハラズリ、ナデ	底部ハラズリ ハラナデ		99
6 C-919	土器	片	片	SK2083	底	残存高 (6.6) 施作7	ハケナ	ハケナ	摩滅	100
7 C-932	土器	片	片	口付13	番号17.5	底往6.4	二輪部ヨコナデ 体部ケズ	山形部ヨコナデ、体部ヘラナデ	摩滅	97
8 E-172	灰陶器	片	片	SD2076	口付9.4	番号1.8	ロクソナデ	ロクソナデ		96
9 E-471	灰陶器	片	片	口付 (15.6) 番号4.5	無	円輪ハラズリ、ロクロナデ	ロクロナデ			98
10 K-254	石器	小形	小形	SA616	鋪り方	最高大約 5 番号3.4			特痕無打痕あり	103

第28図 第148次調査区出土遺物

SD2076溝跡に切られている。

SK2083土坑 調査区東壁ぎわで発見された土坑で、東西90cm以上、南北155cm、深さは55cm程度である。壁は直線的に立ち上がり、底面はおむね平坦である。堆積土は1層である。

遺物は体部から底部にかけて全面にハケメ調整された土師器C-919裏（第28図6）、土師器の小片、割れた縁が少量出土している。

SD2076溝跡に切られている。SK2081土坑との重複は確認されなかった。

SK2096土坑 調査区北壁ぎわで発見された土坑である。東西110cm、南北100cm以上である。遺物は出土していない。

SB2040掘立柱建物跡を切り、SA616材木列に切られている。

SK2097土坑 調査区北西隅で発見された土坑である。詳細については不明である。

SA2030材木列、SX2098性格不明遺構、ピット5を切る。

SX2094性格不明遺構 調査区の南西隅で発見した遺構である。詳細については不明である。

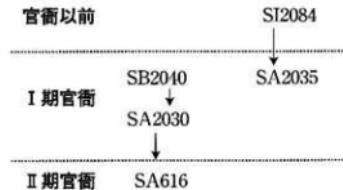
SX2098性格不明遺構 調査区北壁ぎわで発見された遺構である。詳細については不明である。

SA616材木列、SB2040掘立柱建物跡、SA2035材木列、SK2097土坑に切られている。

その他に表土中より土師器C-926裏（第28図5）、第II層より体部が球形の土師器C-932裏（第28図7）、リング状のつまみで天井部にふくらみをもつ須恵器E-471裏（第28図9）などが出土している。

3.まとめ

今回の調査ではほぼ推定した位置より方四町II期官衙北辺材木列が検出された。さらにI期官衙の材木列や官衙以前にさかのほる堅穴住居跡も発見されている。今回発見された主な遺構の重複関係を整理すれば次のとおりである。



SA616材木列は方四町II期官衙外郭北辺となる材木列である。材木列の掘り方は南側では深さ40cm程で一度平坦になってから直立気味に掘り込まれ、北側ではろうと状に傾斜を保ちながら深さ90cm程で直立気味となっている。材は掘り方南壁に密着して据えられており、南壁下部では材を充填した際に材先端により抉られたと見られる箇所がある。掘り方北側の形状と合わせて考えると、材は北側から充填され立てられたものと考えられる。材底面は平坦に加工されている。材は腐食しており、上部が空洞化して木質部は残存していないかったが、遺構検出面からは長さが約190cmの材痕跡が確認された。秋田県仙北町に所在する払田横跡の調査成果では「材木列の材木は全長4.6mあり、地下部分が1m、地上高は3.6mである。」と報告されている（註1）。地下に埋設されていた部分の深さからは、郡山遺跡の方四町II期官衙に伴う材木列も地上では同等かそれ以上の高さを持った場であった可能性が考えられる。

今回の調査区の位置から方四町II期官衙の北門跡が発見されることも予想されていた。しかし材木列に伴うII期官衙の柱穴等は発見されなかった。ただし調査区の東端で材木列の掘り方が広がりを見せ、特に南側ではやや方形気味に角張る形状を示している。このような形状は、昭和56年度の第16次調査における方四町II期官衙西辺の材木列に取り付くSB134掘立柱建物跡でも検出されている（註2）。SB134掘立柱建物跡は、SA138材木列を跨ぐように2間×2間かそれ以上の縦柱建物跡と見られ、西辺に取り付く槽状建物跡と考えられている。SA138材木列の掘り

方がSB134建物跡の棟通りを兼ねる部分では掘り方が広がり一部角張り方形気味になっている。このような材木列掘り方の形状の変化から今回の調査区の東隣接地にも材木列を跨ぐような柱穴があり、構状建物跡や門跡となる遺構が存在することが充分考えられる。

方四町Ⅱ期官衙の材木列に先行するⅠ期官衙の材木列が約3m離れ、並行して調査区を横断している。このような規模、形状の材木列が平行して発見されている例は、昭和59年度の第48次調査区のSA577、578材木列と平成4年度の第96次調査区のSA272、1380材木列（註3）でⅠ期官衙東辺と南辺においてである。よってある時期に今回の調査区で発見されたSA2030とSA2035材木列がⅠ期官衙の北辺になっていたと見ることも可能である。しかし、SA2030材木列に先行するSB2040建物跡との関係に注目したい。SB2040建物跡は籠柱建物跡で柱穴の規模等からはⅠ期官衙の中枢部分の周辺で発見されている倉庫建物跡と同様の遺構と見ることができる。この建物跡はSA2035材木列とは重複がなく約170cm離れて平行している。必ずしも同時存在したとは断定できないが、SB2040掘立柱建物跡の柱穴抜き取り穴がSA2035材木列と重複していないことから、SB2040掘立柱建物跡の南外側をSA2035材木列が区画していたと解釈することができる。

この建物を切るSA2030材木列は抜き取りが深く、材痕跡がほとんど残っていない。このことは建物を遮蔽したと推定したSA2035材木列が一部抜き取りは見られるが材痕跡が残っているものと大きな違いである。これは後に方四町Ⅱ期官衙北辺となるSA616材木列の構築に伴いSA2030材木列が徹底して抜かれていることを示しているのではないかろうか。よってSB2040・SA2035→（抜き取り）→SA2030→（抜き取り）→SA616の変遷を想定しておくことにする。そうであるならばSA2035は内部区画であり、SA2030の時期については周辺の様相が明らかにできなのでⅠ期官衙北辺となるかについて今は今のところ断つことを避けたい。いずれにしても今回の調査によりⅠ期官衙の遺構はこれまで確認されていた建物跡や材木列の地点より北へ50m程広がったことになる。Ⅰ期官衙の南辺と東辺は直行せず、角度が鈍角となるため今回のⅠ期官衙材木列と南辺との距離を計測するのが難しいが、Ⅰ期官衙の南北はおむね600m程の広がりを有することになる（註4）。この調査区より北部においては住宅の密集地となっているためⅠ期官衙の広がりをさらに確認することは困難であるが、今後小規模な調査を積み重ね、検討を加えていくことにする。

SA2035材木列に切られるSI2084堅穴住居跡からは土師器壺7点、塊1点、瓶1点、甕1点が床面やカマド周辺から出土し同時に使われていたものと考えられる。特に壺類はきわめて良好な残存状況であった。Ⅰ期官衙以前の上部器類がこれほどまとまって出土するのは稀である。特に壺類の形態が東北地方の土師器編年で古墳時代後半の標準上器とされる「栗圓式」の土師器壺とはまったく異なっている。体部中に段や棱が多く口縁部が内弯あるいは直立気味になるものがほとんどで、口縁部内外面にはヨコナデ調整され、内面黒色処理されないものが含まれている。このような特徴は関東地方の古墳時代の土師器の「鬼高式」と呼ばれるものに共通する特徴をもつものである。これについては近年仙台平野の各所から出土が報告され（註5）、6世紀後半から7世紀中葉の年代觀が示されている（註6）。これらは須恵器壺模倣形態とも言われ、本遺跡でも昭和57年度の第24次調査においてⅠ期官衙より遡る堅穴住居跡（SI260・290・301）から同様の土師器壺類が出土している。SI2084堅穴住居跡から出土した土師器壺類と比較してみると、今回出土したものは口縁部の屈曲に鋭さがなくなり、丸みをもっている。このような形態の差を時間的な経過による形態変化とするか、移民などにより持ち込まれた関東地方の地域差によるものなのかについては、今の段階では明らかにするのは難しい。ただ黒色処理の技術が導入されていることからは東北地方の土師器製作から影響を受けていることは間違いないであろう。これらをさらに検討するためには関東地方の土師器と在地の土師器の共存関係における形態や調整の変化、さらに関東地方の地域の変化による土師器の違いをより詳細に吟味していく必要があると思われる。



67 第148次調査区全景（北より）



68 第148次調査区全景（西より）



69 SA2035断面



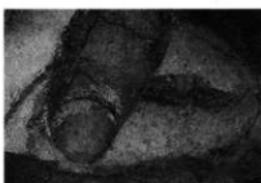
70 SA2030断面



71 SA2035断面



72 SB2040S2E2柱穴



73 SB2040S1E2柱穴



74 SB2040S1E1柱穴



75 SA2035全景（西より）



76 SI2084全景（西より）



77 SI2084遺物出土状況（西より）



78 SI2084カマド断面（北より）



79 SI2084遺物出土状況（南より）



80 SI2084遺物出土状況（C-933）



81 SI2084遺物出土状況（C-918）



82 SK2079土坑（南より）



83 第148次調査区遺物出土状況（C-932棟、E-471塗）



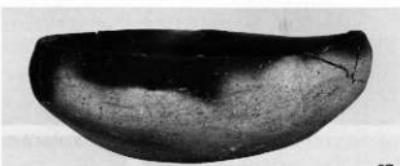
84



85



86



87



88



89



90



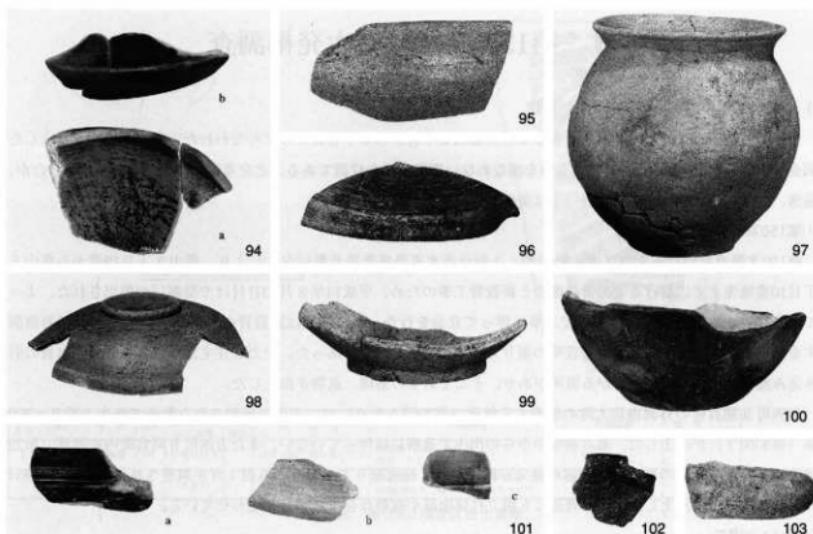
91



92



93



84	C-920	坏	SI2084床面	95	C-930	坏	SI2084
85	C-921	坏	SI2084床面	96	E-472	蓋	SD2076 Ⅱ
86	C-922	坏	SI2084床面	97	C-932	甕	Ⅱ層
87	C-923	坏	SI2084床面	98	E-471	蓋	Ⅱ層
88	C-924	坏	SI2084床面	99	C-926	甕	表土
89	C-925	坏	SI2084床面	100	C-919	甕	SK2083
90	C-927	坏	SI2084床面	101a	C-937	坏	SB2040 S2E2抜き取り
91	C-933	鉢	SI2084床面	b	C-936	坏	SI2084 Ⅱ
92	C-918	甕	SI2084床面	c	C-935	坏	SA2035
93	C-917	甕	SI2084床面	102	C-931	不明品	SB2040 S1E2
94a	C-938	坏 (上面)	SA2030・2035	103	K-254	不明品	SA616
b	C-938	坏 (側面)	SA2030・2035				

註1 秋田県埋蔵文化財調査報告書第289集「払田横跡II - 区画施設 -」1999.3

註2 「Ⅷ 第16次発掘調査」仙台市文化財調査報告書第38集「郡山遺跡II - 昭和56年度発掘調査概報 -」1982.3

註3 「Ⅸ 第48次発掘調査」仙台市文化財調査報告書第74集「郡山遺跡V - 昭和59年度発掘調査概報 -」1985.3

註4 「Ⅹ 第96次発掘調査」仙台市文化財調査報告書第109集「郡山遺跡X III - 平成4年度発掘調査概報 -」1993.3

註5 村田晃一「7世紀集落研究の視点(1)-宮城県山王遺跡・市川街道跡を中心として-」『宮城考古学』第4号 2002.5

註6 註5に同じ P66 註3

VII 第150次・第151次発掘調査

1. 調査経過と発見遺構・出土遺物

第150次調査と第151次調査は、仙台市太白区郡山3丁目から6丁目にかけて行なわれた工事に関連して対応した調査である。両工事とも基本的に遺構を損なわない掘削深度や位置であることを考慮した立会調査で対応したが、遺構、遺物が発見された箇所においては発掘調査を実施した。

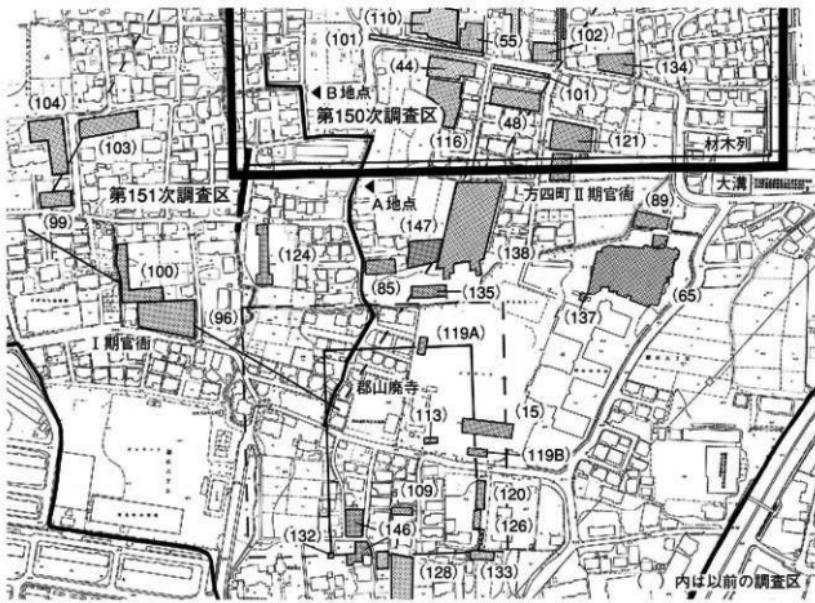
(1) 第150次調査

第150次調査は仙台市太白区南大野田29-1 仙台市水道事業管理者瀬川安弘氏より、郡山3丁目19番から郡山5丁目10番地先までにおける老朽管の撤去と新設管工事のため、平成14年8月23日付けで発掘届が提出された。よって9月10日から11月13日までの間で工事に伴って立会を行なった。工事は既設管の掘削範囲を深さ0.8mで再掘削するもので、ほとんどが既設管理設時の掘り方の中に納まるものであった。ただし住宅地へのガス管や下水管の引き込み部分では掘削深度が下がる箇所があり、そこで若干の遺構、遺物が出土した。

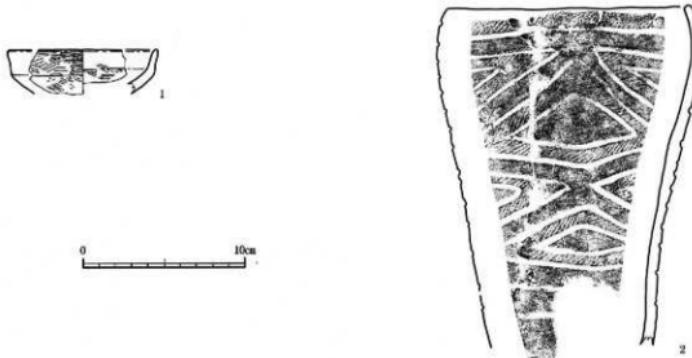
方四町Ⅱ期官街の外郭南辺大溝の通過する付近（第29図A地点）で、工事で掘削された底面で弥生土器B-290鉢（第30図2）が出土した。基本層位中からの出土で遺構には伴っていない。また方四町Ⅱ期官街内南西部（第29図B地点）では複数の掘立柱建物跡の柱穴が観察され、柱穴掘り方中より内外面ミガキ調整された土師器C-934壺（第30図1）が出土した。この周辺にも掘立柱建物跡が複数存在することを窺わせている。

(2) 第151次調査

第151次調査は仙台市太白区長町南三丁目1-15仙台市太白区長菅野昭夫氏より、郡山2丁目11-16から郡山6



第29図 第150次・第151次調査区位置図



調査 番号	位置番号	種別	形状	出土地點 山土遺構 番号	法 量 (m)	外面調整	内面調整	目 考	写真 記録
1	C-904	土解剖	坪	B地点柱穴	口径 9.2cm 底径 7.2cm	口縁部・全体 底部 ケズリ→ミガキ	ミガキ		
2	B-290	発生土管	鉢	A地点	口径14.8cm 底径10.9cm	口縁部 LR鉛文 (頬部) → 花文 (側面) 全体 LR鉛文 (腹) → 花文 + ナデ	ナデ		

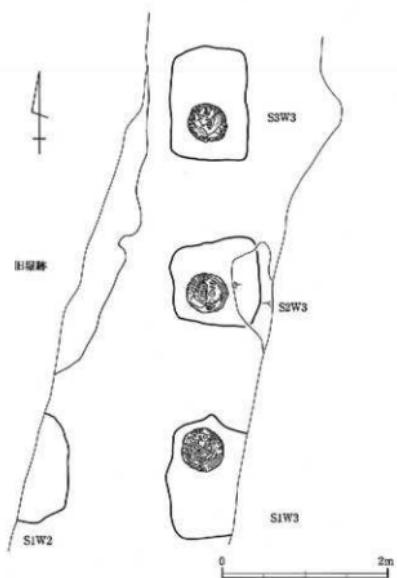
第30図 第150次調査区出土遺物

丁目226番地先までにおける農業用排水路（天王掘）改修工事に伴って対応したものである。現状は既に水路となっており古代の遺構を削平している。ただし昭和55年度の第7次調査において当時の水路底面で、方四町II期官衙南西コーナーとなる槽状建物跡と西辺材木列が発見されている。その後周辺の宅地化が進み住宅地における排水路の整備が求められるようになり、今回水路の現況より35cm～51cm程度掘削を伴う改修工事が必要となった。工事に伴って立会を行ない、槽状建物跡の一部が発見された箇所で平成15年3月3日から3月5日まで発掘調査を実施した。なお遺構が損なわれないよう工法の変更について協議し、施工後も保護されることになった。

方四町II期官衙外郭南西コーナーとなるSB51槽状建物跡は2間×2間の柱状建物跡と推定されている。第7次調査において西から2列目までの柱穴を検出し、S3W2柱穴の掘り方が北へ延びSA65西辺材木列（註1）となっていた。今回これらの遺構の存在が想定された箇所は、宅地への出入口となっているコンクリート製の橋の直下である。橋の撤去後に直径50～55cmの柱材の上部と一辺90～135cmの掘り方を検出した。柱間寸法は200～210cmである。検出した柱穴の形状とSA65西辺材木列が取り付いていないことから、昭和55年に検出した槽状建物跡の柱ではなく、さらに1列東側の西3列目の柱列を検出したものと考えられる。周辺が宅地化した際にやや蛇行していた水路を東寄りに付け直したため、水路の位置が微妙に東へ移動したものと見られる。

なお、このSB51槽状建物跡については、規模や形態について「総括（2）」で改めて検討する。

註1 「図2、(2) 第7次調査区」P21・22 仙台市文化財調査報告書第29集「郡山遺跡I - 昭和55年度発掘調査概報 -」1981.3



第31図 第151次調査区平面図 (1/60)



104 SB51西3柱穴 (南より)



106 SB51 S2W3柱穴 (東より)



105 SB51 S3W3柱穴 (西より)

VII 総括

今年度の調査は第5次5ヵ年計画の第3年次目にあたり郡山廃寺南部と南方官衙西地区の調査などを行った。郡山廃寺南部では迴廊や築地などで金堂や塔を囲む寺院内でも最も重要な地区的南端が含まれると考えられた地点である。南方官衙西地区はⅠ期官衙東辺とも重複しておりⅠ期官衙、Ⅱ期官衙双方の視点から重要な地点である。また、個人住宅の建替えのうち、基礎構造が深く遺構を損なうような住宅建築については「仙台平野の遺跡群」として2件の小規模な調査を実施した。

(1) 郡山廃寺の調査

第146次調査では想定した位置からは金堂（区画溝跡）や塔（推定）を区画するような遺構は発見することができなかった。これはこの地点が元々空闊地となっているのか、または築地など地表に盛り上げられた遺構が完全に削平されて失われているのかということである。今回の調査では創建期ではないが東西棟のSB2025掘立柱建物跡が発見されていることから、この地点には寺院内の重要な部分を区画する遺構は通過していないと見ておくべきであろう。寺院南辺となるSA1850材木列から北へ35mまで調査区を連続して設定して調査したので、その間に新たに新たな区画施設がない以上さらに北側に存在するものと見ておく。住宅地内での調査であるため制約が多く、これ以外の地点での追加した調査は難しい状況にある。

SB2025掘立柱建物跡は郡山廃寺の創建期の建物ではないと考えられた。昭和61年度の第63次調査で講堂基壇の北側から掘り方や柱痕跡の規模が同じ様な掘立柱建物跡が数存在しており、Ⅱ期官衙と並行する郡山廃寺の時期の中で3期の変遷を考えた。これらの遺構についても配置や重複関係から創建期まで遡らない建物跡も含まれているということである。それらと同じく今回発見されたSB2025掘立柱建物跡も創建期に遡らない遺構であるということである。そこで問題になるのがその下限の年代である。

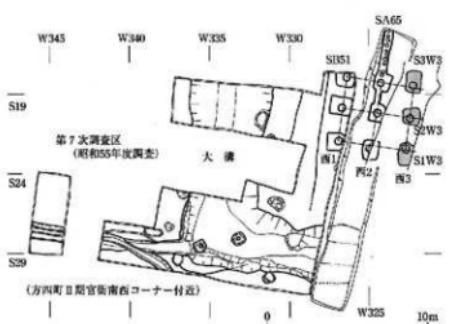
これまで郡山廃寺はⅡ期官衙が廃絶する時期と時を同じくして廃絶していると考えてきたが、今回の調査成果からは多賀城廃寺が創建される時期以降も存続している可能性が出てきた。Ⅱ期官衙が多賀城以前の初期陸奥国府（衙）と考えられている（註1）ことから、郡山廃寺も多賀城廃寺の前身の国府の寺として機能していたとすると、陸奥国が管轄する寺院が多賀城と郡山と両方に存在していた時期があると考えられるのではないだろうか。

畿内では藤原京から平城京への移転に伴い飛鳥に存在した官営寺院もまもなく飛鳥から奈良に移転する。しかしながら飛鳥の地においても寺院として存続している。元興寺が建立されたのちも飛鳥寺の伽藍はそのまま残されており、双方を一つの寺院として扱われている。薬師寺についても寺院が移転した後の8世紀代にも元薬師寺がなお存続している可能性が指摘されている。

(2) Ⅱ期官衙の調査

第147次調査の南方官衙地区の調査では昨年度の第138次調査で発見されたようなSB2010・2015掘立柱建物跡などの大きな廻付建物はないようである。また、第148次調査では方四町Ⅱ期官衙の北辺（材木列）を推定位置で検出し、南辺などと同じ構造になっていることを確認した。

第151次調査では、方四町Ⅱ期官衙南西コーナーの櫛状建物跡の一部を発見した。これは昭和55年度の第7次調査で発見されていたSB51掘立柱建物跡で、これまで南北2間、東西2間（柱間寸法210cm等間）の縦柱建物跡であると考えてきた遺構である（註2）。この建物跡の北側には方四町Ⅱ期官衙西辺材木列であるSA65材木列が柱穴振り方に接続して北に延びている。南辺材木列との接続部分についても方四町Ⅱ期官衙南辺材木列であるSA33材木

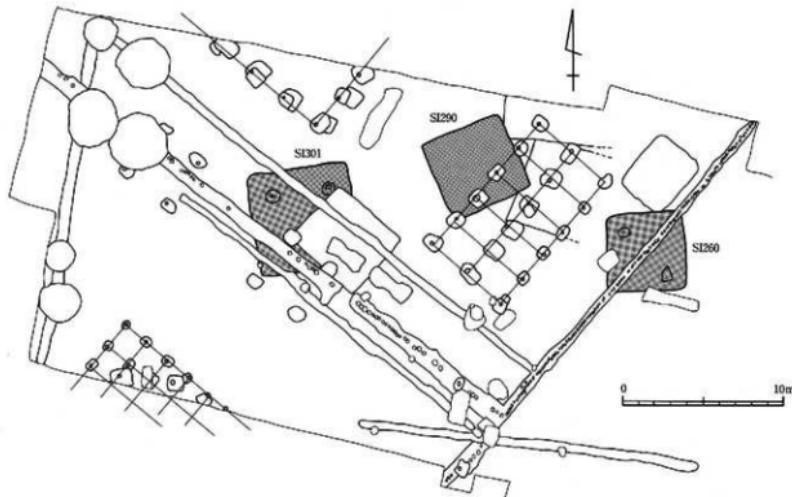


第32図 第7次・第151次調査区遺構配置図

在すると考えられる東側は既存道路が存在し今後調査することが難しい地点ではあるが、SB51の詳細については周辺での調査成果を待ってさらに検討していきたい。

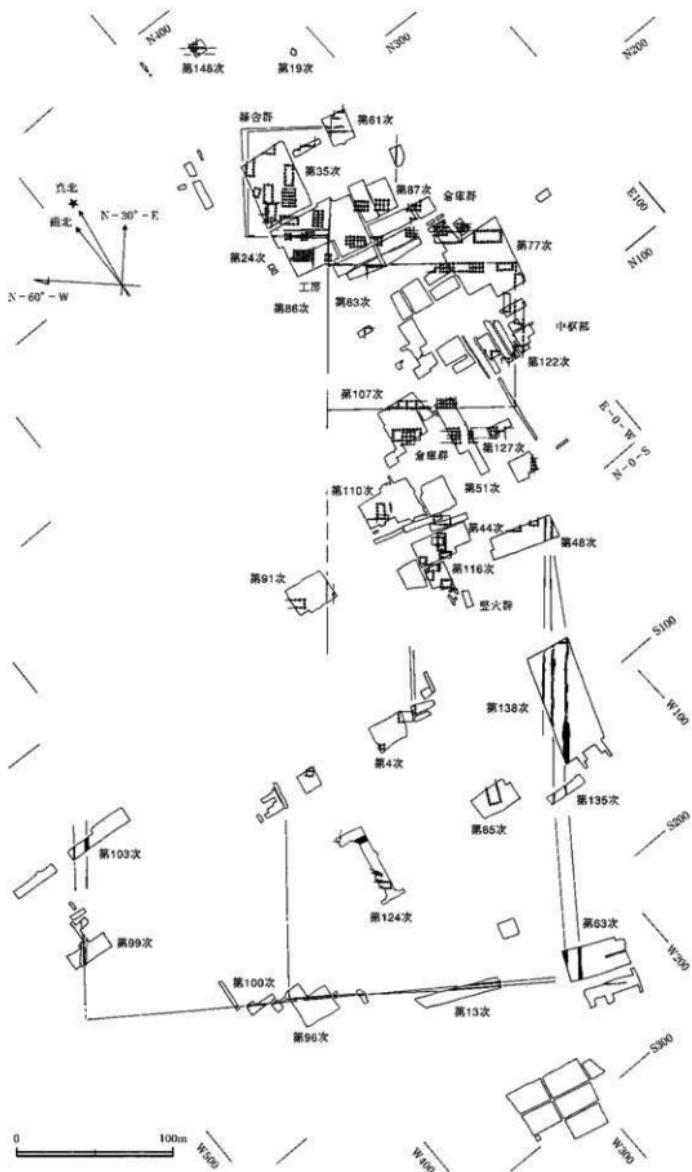
(3) I期官衙とそれ以前の遺構の調査

第148次調査においてI期官衙関連の遺構とそれ以前の遺構が発見された。この地区では調査の制約が多く、さらにどのくらいI期官衙が北へ延びるかは早急に確認することは難しいであろう。I期官衙以前の竪穴住居跡は第24次調査で発見されていたが、それを含めても4例目である(第33図参照)。SI260竪穴住居跡やSI301竪穴住居跡から出土した口縁部が内面に傾き外部に稜線を形成するような形態の土器器坏は、本遺跡においては千葉県地方と



第33図 第24次調査区平面図から(1/300)

列の延長部がSB51掘立柱建物跡の東西中心線と一致することから接続部は同様であると考えてきた。第151次調査では第7次調査の西に隣接した部分での調査であったため、これまで想定していた西3柱穴列が発見された。しかし西柱穴列中央の柱穴(S2W3)に接続すると考えていた方四町Ⅱ期官衙南辺材木列の掘り方は発見されなかった(写真106)。遺構が検出された標高からは材木列の掘り方が削平されているとは考えられない。よってSB51掘立柱建物跡の東側にはさらに建物が延びて柱穴列が存在していると考えられ、SB51掘立柱建物跡は南北2間、東西3間以上の規模を持つ可能性が高いのではないだろうか。柱穴が存



第34図 一期大通街全体図

の土師器の比較（註3）から、関東地方の土師器編年で古墳時代後期に位置付けられている鬼高式後業の土師器に類似性のあることを指摘していた（註4）。発見された昭和58年当時には仙台平野の中で他に発見例が乏しいことから、T期官衙建設に何らかの関わりを持つ人々の住居跡に伴ったものであろうとしておいた。しかしその後に同様の形態のものが、南小泉遺跡や藤田新出遺跡、下飯出遺跡などで発見されている。これによりこのような形態のものが仙台平野内で複数存在することが確認されてきた。

そのような中でこれらの土器について長谷川厚氏は千葉県印旛沼周辺の土師器坏に酷似することを指摘した（註5）。また村田晃一氏は宮城県域内の7世紀後葉から8世紀代にかけての土師器の検討の中で、関東地方からの移民に伴った土師器の県内での分布などを論じ、関東地方の鬼高式の形態に類似したものを「須恵器坏模倣」として扱っている（註6）。また同氏は近年、7世紀の集落の在り方の検討の中で、仙台周辺から宮城県南部の沿岸部にかけて千葉県印旛沼周辺地域との間に交流圏が形成されているとの論考を提示するに至っている（註7）。

このように複数の地点から関東系土師器の出土が報告され、関東地方との交流が指摘されるると単に拠点的な官衙の造営に伴っての人々の移住とだけは見れないと考える次第である。これらの出土した遺跡が仙台平野の中央から北部に及び、個体数も一箇所からまとまって出土している様子を見ると仙台平野への移住のような大規模な行動が行なわれて、その後官衙の造営に結びついたと考えられるのではないだろうか。

今回出土した土師器類も細部を検討していかなければならぬが、上記のような官衙成立以前の状況下で遺跡内に持ち込まれたものと考えられる。

註1 仙台市史編さん委員会『仙台市史 通史編2 古代中世』第2章「陸奥の国と仙台平野」(今泉隆雄) 2000

今泉隆雄「多賀城の創建-郡山遺跡から多賀城へ-」『条里制・古代都市研究 通巻17号』2001 ほか

註2 「Ⅱ 2.(2)第7次調査区」 仙台市文化財調査報告書第29集『郡山遺跡I -昭和55年度発掘調査概報-』1981.3

註3 昭和58年当時に千葉県印旛郡栄町向台遺跡、阿大畠遺跡、佐倉市大崎台遺跡出土遺物と直接比較し、検討を行った。

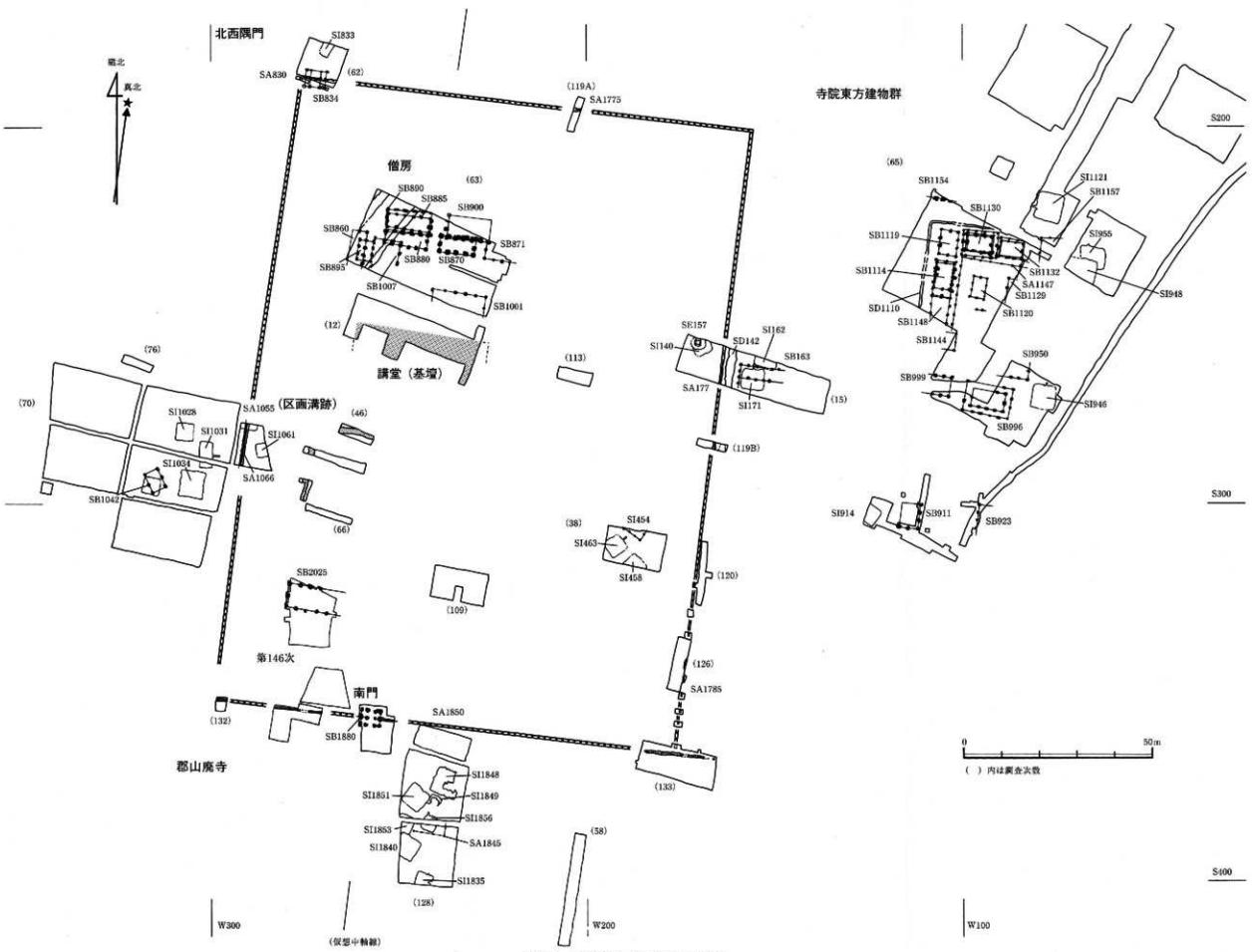
註4 「Ⅲ 第35次発掘調査」P53, P74 仙台市文化財調査報告書第64集『郡山遺跡Ⅲ -昭和58年度発掘調査概報-』1984.3

註5 長谷川厚「関東から東北へ-律令成立前の関東地方と東北地方の関係について」

『21世紀の考古学』柳井清彦先生古希記念論文集 雄山閣1993

註6 村田晃一「飛鳥・奈良時代の陸奥北辺-移民の時代-」『宮城考古学 第2号』2000.5

註7 村田晃一「7世紀集落研究の視点(1)-宮城県山王遺跡・市川橋遺跡を中心として-」『宮城考古学 第4号』2002.5



第34図 道跡南部遺構配置図 (1/1000)

調査成果の普及と関連活動

1. 広報・普及・協力活動

年月日	行事名称	担当職員	主催
2002. 5. 8	古代城柵を訪ねる旅	木村・長島・松本	横浜市歴史博物館
7. 5	発掘現場・展示室・ピロティ見学	長島・松本	八木松小学校 6年
8. 6	発掘現場・展示室見学	松本	山田中学校 2年社会科
9. 10	発掘現場・展示室見学	長島・松本	郡山老人福祉センター
10. 7	発掘現場・展示室・ピロティ見学	長島・松本	太白区まちづくり推進課
11. 14	発掘体験・展示室見学	松本	南中山中学校 1年総合学習
11. 20	発掘現場・展示室見学	長島・松本	東長町小学校 4年
11. 20	展示室見学	長島	郡山中学校
12. 12	展示室見学	松本	郡山小学校 6年
12. 21	宮城県遺跡調査成果発表会	松本	宮城県考古学会 多賀城市教育委員会
2003. 1. 21	古代庭園研究会	長島	奈良文化財研究所
2. 8~9	第29回古代城柵官衙遺跡検討会	長島・松本	古代城柵官衙遺跡検討会

2. 調査指導委員会の開催

第32回 郡山遺跡調査指導委員会 平成15年3月18日 教育局第1会議室

○平成14年度の調査成果について

○平成15年度の調査計画について

3. 資料の貸し出し・展示

東北歴史博物館	常設展「古代」城柵とエミシ
仙台市博物館	常設展「原始・古代・中世」
横浜市歴史博物館	企画展「東へ西へ－律令国家を支えた古代東国の人々－」
宮城学院女子大学	博物館実習
鈴鹿市考古博物館	特別展「発掘された国府－東海道・東山道の国府を握る」
水沢市埋蔵文化財調査センター	胆沢城造営1200年記念「胆沢城展」
富沢遺跡保存館	企画展「土の中からのメッセージ 発掘された仙台の遺跡7 －古代のみちのおく郡山遺跡－」

4. 展示室の利用者

平成14年4月～平成15年3月 364名



横浜歴史博物館 企画展「東へ西へ－律令国家を支えた古代東国の人々－」

報告書抄録

ふりがな	こおりやまいせき						
書名	郡山遺跡23						
調査名	平成14年度発掘調査概報						
巻次	23						
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第263集						
編著者名	長島榮一、松本知彦						
編集機関	仙台市教育委員会						
所在地	〒980-8671 宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7-1 TEL022-214-8893~8894						
発行年月日	2003年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号				
郡山遺跡	宮城県仙台市 太白区郡山三丁目他	04100	01003	38°12'58" 53"41"	20020522 ~20021213	1,082m ²	重要遺跡 の範囲確 認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
郡山遺跡	官衙跡 寺院跡	縄文 ~近世	掘立柱建物跡・材木列 溝跡・土坑	弥生土器 土師器・須恵器・瓦 土製品・石製品・金属品	方四町Ⅱ期官衙北 辺材木列で検出面 から深さ約190cm の材痕跡を確認		

仙台市文化財調査報告書第263集

郡山遺跡23

—平成14年度発掘調査概報—

2003年3月

発行 仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市青葉区国分町三丁目7-1

文化財課 022(214)8893

印 刷 株式会社 東 北 プ リ ン ト

仙台市青葉区立町24-24

TEL 263-1166

